

古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城 ― 築城背景と役割を探る ―

近藤 浩一

はじめに

六六三年の白村江の敗戦直後、北部九州から瀬戸内・近畿地方にかけての西日本には、倭王権によって百済遺民の協力のもと山城が造営された。築城記録があるものは次のようである⁽¹⁾。

- ①遣達率答怱春初、築城於長門国。遣達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。『日本書紀』天智四年(六六五)八月条
- ②築倭国高安城、讃吉国山田郡屋島城、対馬国金田城。『日本書紀』天智六年(六六七)十一月是月条

本稿で主題とする鞠智城(③)(⑥)を参照。築造記録はなく修繕記事のみ存在)を含めて文献に名前がみられるものを一般的には朝鮮式山城と呼び、列石を伴う城壁や水門の遺構などをもちながらも記録がないものを神籠石系山城としている。ただ最近では、両者は基本的に同じ構造物であるため区別せず古代山城として扱われている。亀田修一氏によれば、記録があつてその所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城は六カ所、記録にみられない神籠石系山城は一六カ所、合計二二カ所の古代山城が確認されているという。

こうした古代山城に対する調査・研究は、考古学を中心に進展がめざましい。朝鮮半島の山城との構造を中心とする比較史的研究によって半島系技術の影響が早くから指摘されてきたが、近年では山城内部の建物の基礎構造、城門・石垣・土塁の特徴はもとより

貯水池跡・付属建物までより具体的な研究が進められており、国内外の各山城間にみられる類似点・相違点までが指摘されてきている(成周鐸一九八九、西谷一九九四・二〇一〇、亀田二〇〇八、磯村二〇一〇、岡田二〇一〇、小田二〇一二、熊本県教育委員会二〇一四など)。それによって全ての古代山城を、唐・新羅連合軍に対する防御施設(緊急時の逃げ城や兵站基地の役割を含む)と同一に扱う、固定した山城観にとられない研究の必要性が提唱されている(向井二〇〇九・二〇一〇)。特に、未完成とみられる山城が多数存在することが明らかにされ、山城にはその分布からも当初より「見せるため」の視覚的な側面が重視されていたという指摘(向井二〇一〇、亀田二〇一四)は、山城の築城目的・役割に複雑な問題が絡んでいたことを想起させる。さらに山城の築城意義を、駅路との関係及び工事への動員を伴う倭王権の地域支配の一環や、大宰府の総領制・在地勢力との関係から再検討した論稿(相原二〇〇四、狩野二〇〇五、八木二〇〇八、仁藤二〇一〇、出宮二〇一三)も増えてきている。白村江敗戦後の緊迫した対外関係史よりは倭国史全体のなかでアプローチしようという向きのあらわれである。

こうした視点は、最近の鞠智城の築城背景や役割を論じた研究では一層顕著になってきている。白村江敗戦後の緊迫した東アジア情

勢の中でその造営を考える研究は意外にも少なく、大宰府の後方に位置する兵站基地や有明海からの侵入を防ぐ防御施設とみなす旧来の見解（笹山二〇一〇、西住ほか二〇一二など）は発展的に継承されていない。すなわち、倭王権の在地支配、地域間交流のなかで検討されることが多く、歴史地理学の研究成果である車路に隣接することや立地が台地上で内部に「コ」の字形の律令期の官衙的建物群をもつことに注目され、さらにその延長線上に南九州の隼人に対する前線基地の役割を付与する研究も盛んである。また鞠智城の防衛・外交上の性格を重視した研究であっても、築造期よりは六九八年の修繕期以後の役割やそれが九世紀後半まで存続した理由を律令国家の制度のなかで検討したものである（鶴嶋一九九七・二〇一一、木村二〇一四、鞠智城跡「特別研究」二〇一三・二〇一四など）。

古代山城、殊に鞠智城においては多様な視角から解明されてきている。しかしながら文献からみれば、①・②の通り古代山城は、白村江敗戦の二年後、さらに言えば勝利した側の唐（朝鮮半島の熊津都督府・百濟鎮將）の使節が戦後初めて来倭した天智三年（六六四）の翌年から築城されているため、朝鮮半島との関係は不可分と考えられる。唐使節は六六五年・六六七年にも続けて来倭するが、まさにその年に山城が築城されているのは、両者に複雑な駆け引きが存在したとも推定できる。白村江敗戦後の日朝・日唐関係史については、戦前の池内宏氏以来、戦後の木宮泰彦・森克己・鬼頭清明・鈴木靖民、近年の森公章の諸氏にいたるまで重層な研究史が存在する。その一人鈴木氏は敗戦後の日唐交渉と倭の山城造営の関係にも論及するが、とりわけ当初は唐を意識して築城されたとしている（鈴木二〇一一a）。この指摘は山城の直接の築城背景・目的を考える

上で重要である。さらに朝鮮古代史を専攻する立場からいえば、白村江以後初めて新羅が来航する六六八年以前に山城の築城が始まったことは、半島情勢でも唐が占領していた旧百濟地域との関係の中でのことであり、白村江以後のその地域の政権の実体にスポットを当てた検討が必須であると思われる。

本稿では、諸資料にみられる鞠智城並びに肥後地域と朝鮮半島の関係を概観したのち、肥後地域は歴史的にも百濟地域（半島西南地域）と深い交流をもっていたためその前史を踏まえつつ、白村江直後における旧百濟に置かれた唐の熊津都督府と倭王権の外交に着目しながら新たに誕生した鞠智城の築城背景及び役割を検討する。特に、戦後の緊迫した外交・交流の中で鞠智城、ひいては倭国の古代山城が担った役割を、朝鮮半島側の立場に立つて論じてみたい。

一．史料からみた鞠智城と朝鮮半島西南部情勢

（一）史料にみられる鞠智城

文献にみられる鞠智城（菊池城）は次のようである。

- ③ 令大宰府繕治大野・基肆・鞠智三城。（『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申条）
- ④ 丙辰、肥後国言、菊池城院兵庫鼓、自鳴。・・丁巳、又鳴。（『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八）閏二月丙辰・丁巳条）
- ⑤ 大宰府言、・・又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉一一宇火。（『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八）六月己酉条）
- ⑥ 又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。（『日本三代実録』元慶三年（八七九）三月一六日丙午条）

その初見記事は、③の六九八年に大宰府に対して大野・基肆・鞠

智の三城の修繕を命じたものである。これによってこの時期鞠智城が大宰府の直接の管理下にあったことがわかるが、翌年の六九九年にも大宰府に同じく北部九州（筑前？）にあったとみられる三野城・稲積城の修繕を命じており、それらは大宰府を中心に連絡網を持ちながら管轄されていたと考えられる。築造記録はみられないものの鞠智城は、大宰府との関係や修繕時期をみても大野城・基肄城と同時期に築城されたとみるのが自然であるとされている（佐藤二〇一四）。その後、八世紀には全く記録がみられず、九世紀後半になると上のように再度史料に登場する。これらの記録は鞠智城内の兵庫・不動倉などの施設物の異変であるが、九世紀後半は九州海域に新羅海賊が出没しそれらに対する警固が固められており、両者の関係が指摘されている（濱田二〇一〇、柿沼二〇一四）。肥後地域における鞠智城の役割は、下に述べるように発掘成果から八世紀～九世紀の間も十分機能していたとされているが、文献史料による限り七世紀後半と九世紀後半が最大規模であったとみてとれるのである。

これは、鞠智城跡の発掘成果とも齟齬していない。能登原孝道「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」第四表が発掘成果をもとに城跡の変遷を分かりやすく整理している。Ⅰ期（七世紀第三四半期～第四四半期）は鞠智城の草創期である。この時期に台地中央部に兵舎・倉庫など掘立柱建物群が建てられるとともに、三カ所の城門や土塁線が整備され、貯水池が造営された。貯水池からは百済系菩薩立像が出土し六六五年の百済遺民の関与が想定されている。常駐した兵士・人々を象徴する土器の出土も築城以前の七世紀前半から七世紀後半のものがみられる。Ⅱ期（七世紀末～八世紀第一四半期前半）

は、コの字型に配置された律令期の管理棟的建物群・八角形建物などが出現し内部施設の充実が図られた隆盛期で、六九八年の繕治記事に対応するとされる。土器の出土量もこの頃のものが全時期を通じて最も多い。Ⅲ期（八世紀第一四半期後半～八世紀第三四半期）は、掘立柱建物が礎石建物に建て替えられている。しかし土器の出土は確認できていない。Ⅳ期（八世紀第三四半期～九世紀第三四半期）は、Ⅱ・Ⅲ期の建物群が消失し礎石建物群が大型化され、食糧の備蓄施設としての機能が増している。土器の出土も九世紀中葉から後半に再び増加している。この頃、七世紀末葉と同様に城の活動が再び活発になったことが窺い知られる。ただⅢ期との間の機能上の変化も推定されている。大型の礎石建物が倉庫として機能したⅤ期（九世紀第四四半期～一〇世紀第三四半期）を経て、その後は終末をむかえ城の機能は停止したとされる（西住ほか二〇一二、能登原二〇一四）。

以上のように鞠智城は、文献からも考古学の成果からも、七世紀後半～八世紀初期（築造期・修繕期）と九世紀中葉～後半（再利用期）に最も機能していたことが読み取れる。創建記録はないが当初から急速に外郭線を整備したことを勘案すると、③の記録はそれ以前も肥後地域で大宰府の管理のもと十分な役割を果たしたため修繕に至ったと考えられる。ところで、日本古代史からみれば前者と後者の時期ではまったく国内事情も異なり両者の隆盛理由を合わせて論じることには無意味と思われるが、朝鮮古代史からみれば、両者の半島情勢は極めて似通っている。両時期の半島西南地域では、前者は唐の政権、後者は豪族政権（特に後百済）というように独立した政権・勢力が生まれているからである。とすれば、鞠智城研究では

再利用期のⅣ期～Ⅴ期を転換期としてきたが、Ⅰ期以来の役割が最も開花したとみなすこともできるかもしれない。再利用期をみることで、改めてⅠ期の築城背景や役割もわかってくる部分が多々あると思われるのである。以下、両時期の半島情勢について簡単に概観したい。

(二) 再利用期(九世紀中葉～後半)の肥後地域と新羅海賊、半島西南地域

九世紀中葉～後半は、山陰から九州海域に大規模な新羅海賊が頻繁に出没するようになり、日本側では対外的脅威を抱きつつ海上防衛を強化した(鄭淳一二〇一一)。本稿で対象とする肥後地域をとりまく北部九州に出現した新羅海賊の事例としては次のようである。

⑦大宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乗艦二艘来博多津、掠奪豊前国年貢絹綿、即時逃竄。発兵追遂□不獲賊。(『日本三代実録』貞観十一年(八六九)六月一五日条)

⑧大宰飛驒使来称。新羅賊於肥後国飽田郡焼亡人宅。又於肥前国松浦郡逃去。(『日本紀略』寛平五年(八九三)閏五月三日条)

⑦は新羅海賊が対外的な面で日本の朝廷・大宰府に衝撃を与えた比較的初期の事件である。この記録は大宰府から朝廷に「六月一五日に新羅海賊船二艘が博多津に来着し、豊前国の年貢絹綿を掠奪したが捕えることができず逃亡した」ことを報告したものであるが、同年七月二日条をみると朝廷が大宰府司に対し国威を損ねる指示・行動とまで叱責している。石井正敏氏は、この事件が大宰府の防衛網の強化を促し、ひいては鞠智城の機能に影響を与えたと推察している。やや時代が下るが⑧(同月二二日庚申条も参照)は、鞠智城

のある肥後、肥前など有明海一帯で新羅海賊が移動を伴いながら海賊行為を働いていた記録である。五島列島は、『安祥寺資財帳』の入唐僧恵運の記録などから中国の舟山群島を結ぶ遣唐使の中継地点で有名であるが、⑨から新羅船も頻繁に來航したことがわかる。

⑨参議大宰権帥従大三位在原朝臣行平起請二事。・其二事。請合肥前国松浦郡庇羅値嘉両更建二郡号上近下近置値嘉嶋曰。・加之地居海中境隣異俗、大唐新羅人來者、本朝入唐使等、莫不經歷此嶋。府頭人民申云、去貞観十一年、新羅人掠奪貢船絹綿等曰、其賊同経件嶋來。(『日本三代実録』貞観一八年(八七六)三月九日条)

早くに戸田芳実氏はこの史料に注目し、⑦の貞観十一年(八六九)に博多津で豊前国官物絹綿の貢納船を襲った新羅人がこの島を経由したという⑨下線部を史料の根拠に、五島列島・有明海地域には新羅船が停泊して博多津の情報を手に入れるような基地が存在し、それと連携する西海の海人集団が活動していたと推測した。戸田氏は、新羅人を掠奪者である海賊とみなすよりは、唐人・新羅人と地域住民の間で平和的な日常交渉がなされており、五島列島の島々が国際交易港の役割を担っていたと理解している(戸田一九九二)。それ以前(八三〇年代)に東シナ海域を股にかけて活動した張保臯や、やや時代が下るが同じく五島列島で活動した倭寇の近年の研究をみても、海賊と国際商人は表裏一体であって、彼らは地域ネットワークを活用して交易にも掠奪にも従事したと考えられる(近藤二〇一四)。

さらに有明海に出没した新羅海賊たちは、肥後地域の郡司をはじめめとする公的権力と何らかの関係を有していたと考えられる。『日本三代実録』貞観八年(八六六)七月一五日条⑩には、新羅人と結

んで対馬島を侵攻しようとした反乱計画への加担者が基肆郡・藤津郡・高来郡・彼杵郡（藤津以下は天草灘・五島灘に面する地域）を根拠地とする郡擬大領層であったとしている。すなわち肥後地域の官人・人々にとって、新羅人（海賊）は一面では敵対する存在でありながらも、彼らとの交流を望んでいたことが垣間見られる。有明海域ではもともと民間レベルでは平和的な交流が存在したともとれるが、肥後地域の官人からみて新羅人は当時日本で政治的にも価値の高い外来品（唐物）をもたらす交易活動者であったため、非常に魅力的な存在であったことだけは間違いない。なお『日本三代実録』によると、日本の地域官人と新羅人の結びつきは、五島列島のみならず山陰や対馬、さらには大宰府などでも報告されている。隠岐の事例では、虚偽の通報であったが浪人が隠岐国前守越智貞厚と新羅人との反逆計画を密告した内容がみられる^(三)。さらに大宰府では、大宰少弐の藤原元利万侶が新羅国王と密通していた事実が発覚したと述べている^(四)。これは⑦の新羅海賊事件の翌年に起きた事件であるため、両者の関連が想起されるばかりか、それらの背後に実体は不明であるが新羅王に比される何らかの勢力がいたことを示唆する。

有明海・肥後地域一帯には九世紀前半から新羅海賊の来航・略奪行為がみられたが、九世紀後半になるとピークをむかえ肥後地域のそれに対応する比重は一層高まったと考えられる。さらに史料には、海賊でない何らかの使節も来航していることが記されている。まず渤海の使節であるが、八七三年三月に薩摩国甕島郡に漂着しその後逃亡した数名が肥後国天草郡の港に移動している^(五)。記録からは、彼らは渤海人であるため許され帰国させられているが新羅人

であれば拘禁するとし、大宰府に管内諸国の警備強化を言明しており新羅人に対する大きな警戒心も読み取れる（石井二〇一二）。そして八八五年六月には、新羅執事省牒を持参し公式的な新羅使節を装った新羅人（執事省牒を偽造して作成できる地方勢力である可能性が高い）が肥後国天草郡に到着している^(六)。それに対してはすぐさま大宰府が調査にあたり、国王の書がなく執事省牒も故実に違うことを朝廷に言上し放還が命じられている。

このように新羅人たちに五島列島の港湾施設が認知されていたばかりか、実際に肥後地域には新羅人と関係をとるもつ官人勢力・場所が存在したことがわかる。なお次の記録は対馬を襲撃した新羅海賊の例であるが、

⑩対馬島司言新羅賊徒船四十五艘到著之由、……僅生獲賊一人、其名賢春、即申云、彼国年穀不登、人民飢苦、倉庫悉空、王城不安。然王仰為取穀絹、飛帆参来。但所在大小船百艘、乘人二千五百人。被射殺賊其数甚多。但遺賊中、有最敏将军三人、就中有大唐一人。

（『扶桑略記』寛平六年（八九四）九月五日条）

その下線部から新羅人には唐人も含まれて国境を越えた集団を形成していたことが窺い知られる（山内二〇〇三）。ともあれ、九世紀中葉以降東シナ海を股にかけて活動する新羅人が来航するようになると、肥後地域は一層大陸に開かれた先進的な地となった。それに合わせるように鞠智城は災異現象に直面しながらも再利用期を迎えたのであって、ここからも城の機能を推論してみることができる。

そこで、その新羅海賊の実体と関連して検討したいのが、新羅王権をとりまく半島情勢である。九世紀にはいると朝鮮半島の西南海岸地域では、中央政府による地方支配が弱まり海賊が横行してい

た。八二二年の金憲昌の乱によって新羅王権の地方支配が完全に喪失すると、八二八年頃には現在の全羅南道莞島を拠点とする地方勢力の張保皋に、軍事・外交権の一部を委託し清海鎮を設置させた。彼はその大使として海賊の奴隷貿易を取り締まり、在唐新羅人とのネットワークを足掛かりに唐・日本との貿易を独占した。しかし半独立的な地位を築いた彼が八四一年に暗殺されると、それ以降西南海岸地域は一層混乱を招いたのであった（蒲生一九七九、李基東二〇〇一、浜田二〇〇二、近藤二〇〇五）。既存の研究でも、九世紀後半は半島各地で大規模な盗賊蜂起が展開し、各地に豪族（城主・將軍）が台頭し群雄割拠の時代をむかえることが指摘されている（李純根一九九二、鄭清柱一九九六、蔡雄錫二〇〇〇など）。その結実是新羅に後百濟・後高句麗を加えた九世紀末の後三国時代であったが、

⑪国内諸州郡、不輸貢賦、府庫虚竭、国用窮乏。王發使督促。由是、所在盜賊蜂起。於是、元宗哀奴等、拋沙伐州叛。（『三国史記』真聖女王三年（八八九）条）

⑫北原賊帥梁吉、遣其佐弓裔、領百余騎、襲北原東部落及溟州管内酒泉等十余郡県。（『三国史記』真聖女王五年（八九一）冬一〇月条）

⑬完山賊甄萱拋州、自称後百濟、武州東南郡県降属。（『三国史記』真聖女王六年（八九二）条）

⑭弓裔自北原、入何瑟羅。衆至六百余人、自称將軍。（『三国史記』真聖女王八年（八九四）冬一〇月条）

⑮賊起国西南。赤其袴以自異。人謂之赤袴賊。屠害州県、至京西部牟梁里、劫掠人家而去。（『三国史記』真聖女王一〇年（八九六）条）

⑯の真聖女王三年（八八九）の元宗・哀奴の乱の頃には、新羅王権

は地域社会に対する統制を完全に喪失していた。この記録には、「国内の諸州・郡が貢賦を輸送して来なくなったために王都の府庫が虚竭したので、王が使者を各地に派遣し催促させたとる盗賊が一斉に大規模な蜂起を起こした」と述べる。この状況はすでに数十年前から全国に及んでおり、『三国史記』弓裔伝をみれば、「見新羅哀季、政荒民散、王畿外州県、叛附相半、遠近群盜、蜂起蟻聚」とあり、国内の半数以上の地域が新羅王権の支配から抜け落ち、賊による半独立的な支配下になつていたことを伝える（近藤二〇〇六）。

西南海岸地域には、⑮の視覚的にも新羅王権との対峙を明示する赤袴賊や⑬の甄萱、後に甄萱と対立する弓裔側についた壓海県賊師能昌など、『三国史記』『高麗史』などの編纂史料にもみられる軍事的・経済的に強固な賊団が多く存在した。特に後百濟は、⑬のように完山州（全羅北道全州）を根拠に後百濟の国号を自称し、元来は新羅の領域であつた所に新王権を樹立したのであった（申虎徹一九九三、全北伝統文化研究所二〇〇一、李道学二〇〇八、金甲童二〇一〇）。『三国史記』甄萱伝には彼が後百濟を建国するまでの事績を記している。それによると、甄萱自身は当初新羅の正規軍に入つて西南地域に派遣され「西南海防戍」の任務を担い「裨將」にまで昇つた人物であつたが、当時の西南地域の情勢をうまく活用して数か月のうちに周辺地域の勢力を集め武州（全羅南道光州）の官庁を攻撃し自ら王や羅西面都統指揮兵馬制置などの地位に就いたことがわかる。⑬には「武州東南郡県が後百濟に服属した」とあつて彼に呼応した勢力の地域が垣間見られるが、李道学氏が詳細にその比定を行つており、現在の全羅南道の麗水市、順天市、光陽市一帯と慶尚南道の河東郡南海郡、泗川市一帯などにあたるという。この地域

は、張保臯勢力とも関係が深く、彼の暗殺後も海上勢力の活動は活発で、彼らが甄萱の台頭にしがいくだったと考えるのが自然であろう。

こうした半島情勢をふまえば、肥後地域に出没した新羅海賊も西南地域の後百済に迎合するような海上活動者であったと推察される。⑩で新羅人捕虜の賢春が「不作と飢饉が発生し税が中央の倉庫に入ってこなくなり、それを補うために新羅王が穀物や絹を掠奪するよう命じた」と供述している（命乞いのために発した虚言も含んでいたであろうが）ことは、⑪～⑮にみられる新羅国内情勢と一致する。⑦～⑩に述べた新羅海賊の活動・規模も、西南地域の豪族勢力のバックアップによるものとみられる。それらの抗争の中で不足した税・物資や抗争に必要な軍事物資の調達のために、日本の海域での略奪行為（または交易）を命じることもあったであろう。ともあれ、このような半島西南地域に割拠した独自の勢力・政権の樹立、それに伴う交通の活発化が、鞠智城の再建にも関わっていたことを指摘しておきたい。

（三）築城期（七世紀後半）の旧百済地域―唐の熊津都督府設置―

ここでは、倭国で山城が築城されはじめる六六五年頃の西南部を中心とする半島情勢を述べてみたい。百済は顕慶五年（六六〇）に蘇定方により平定されると、義慈王と臣僚らは唐に連行され、旧百済地域は唐によって管理された（盧重国二〇〇三、方香淑一九九四、梁鍾国二〇〇九、朴芝賢二〇一三、李成市二〇一四）。当初唐は、百済故地に熊津都督府をはじめ馬韓・東明・金漣・徳安の五都督府を設置し、熊津都督に王文度を充てた他はそれぞれの州

県の酋長を都督等として立てる羈縻支配を行った^⑭。旧百済の王都泗泚城の中央に位置する定林寺の五重石塔には、戦勝記念碑といえる「大唐平百済国碑銘」が刻まれており、そこにも「凡置五都督、卅七州二百五十県、戸廿四万、口六百廿万。各齊編戸、咸變夷風。」とみられる。

その直後各地では百済復興運動が起きたが、六六三年に白村江で倭軍を破つてからは、唐は百済故地の支配権を手中に収めた。また唐は新羅に対しても、白村江直前の龍朔三年（文武王三・六六三）四月に新羅を雞林州都督府、文武王を雞林州都督とし^⑮、名目上唐の一つの州に組み入れている。ただ、白村江直後より唐の旧百済支配及び新羅への対応は、対高句麗戦を意識して穏便な政策に転じたといえる。⑯は麟徳元年（六六四）一〇月に熊津都督劉仁軌が百済故地への守備兵の増強を要請する場面であるが、

⑯ 檢校熊津都督劉仁軌上言・陛下留兵海外、欲殄滅高麗。百済、高麗、旧相党援、倭人雖遠、亦共為影響、若無鎮兵、還成一国。……仁軌謂仁願曰、國家懸軍海外、欲以經略高麗、其事非易。今收穫未畢、而軍吏与士卒一時代去、軍将又歸、夷人新服、衆心未安、必将生變。不如且留旧兵、漸令收穫、并具資糧、節級遣還。……乃上表陳便宜、自請留鎮海東、上從之。仍以扶余隆為熊津都尉、使招輯其余衆。（『資治通鑑』麟徳元年（六六四）冬一〇月庚辰条）

その中で百済故地には高句麗・倭人と通じる者もいて、領内が不安定のなかで軍吏と士卒を同時に交代するような旧百済人たちに動揺を与える政策は慎むべきだと提言し、その過程で前百済太子の扶余隆を熊津都督として赴任させている。さらに『新唐書』劉仁軌伝では、百済故地及び遺民の管理における懐柔策の一環として劉仁軌が

扶余隆を熊津都督に推薦しているのがみられる。ただ扶余隆は、『三国史記』文武王四年（六六四）二月条に熊津で唐の勅使とともに新羅王子の金仁問と会盟したとあるため、二月の時点ですでに帰国していた可能性はあり得る。ともあれ唐は、詳細は後述するが百済王子のみならず多数の旧百済官人を赴任させることで故地の安定をはかるうとし、彼らの尽力によつて翌年の麟徳二年（文武王五年・六六五）八月にはその扶余隆と新羅文武王の会盟を実現させている。

⑰ ① 秋八月、王与勅使劉仁願・熊津都督扶余隆、盟于熊津就利山。

（『三国史記』文武王五年（六六五）秋八月条）

② 又於就利山築壇、对勅使劉仁願、歃血相盟、山河為誓、画界立封、永為疆界。（『三国史記』文武王十一年（六七二）文武王書）

この会盟は熊津就利山で行われたが、両者は互いの領土に介入しないことを誓い、白村江以後不明確であった両国の領土問題が一端解決したのであった。この会盟に至った経緯並びに模様は、後述の『冊府元龜』(29)により詳しく記録されている。

これに合わせて唐配下の都督府による百済故地の支配体制もいくらか変化を遂げている。白村江直後の麟徳年間（六六四～六六五）には、唐本国の地方統治体制（都督府・州・県）に倣い次のように、⑱ 都督府一十三県、嶠夷県、神丘県、尹城県本悦己、……東明州四県、熊津県本熊津村、……支潯州九県、己汶県本今勿、……魯山州六県、魯山県本甘勿阿、……古泗州本古沙夫里五県、……沙泮州本号尸伊城四県、……帶方州本竹軍城六県、……分嶮州本波知城四県、……（『三国史記』地理四都督府七州条）

五都督府体制を辞めて都督府は熊津都督府のみとし、その下に七州・五一県を置く体制に再編成されている。なおこの⑱の内容は、年代

が記されず冒頭の都督府の名も無名であるためいつの地方制度であるか不明であったが、末松保和氏の緻密な考証により七州五一県の地名比定がなされたことで、六六五年八月の百済と新羅の会盟の際に約束された熊津都督府の領域であることが明らかになった。特にこの末松氏の地名比定で重要なことは、熊津都督府の所在地を百済の都であった現在の扶余、東明州を公州としたことである(9)。

すなわち熊津都督府も旧百済の都城並びに行政システムの多くを継承したといえる。ただ、盧重国氏の指摘によれば、一都督府・七州・五一県体制を当初の五都督・三七州・二五〇県体制と比較すると、四つの都督府と三〇の州、一九九の県が減っており、これは旧百済故地に新羅の勢力が介入し多くの地域を失ったためではないかという。さらに盧氏は、都督府配下の七州・五一県の位置が概ね忠南・全北・全南の西海岸地域に集中しているのは、熊津都督府の西南地域に対する比重が一層増したことで想定されている（盧重国二〇〇三）。

このように百済を滅ぼした唐は、性格の変化はあるものの熊津都督府を介して朝鮮半島の支配に乗り出したのであった。熊津都督府が直接管轄していた地域は半島のなかでも西南部であり、それらの地域は次に述べるように歴史的にも古くから倭国と交流があった。百済鎮将側は白村江で倭国に勝利しながらも、⑲（『旧唐書』劉仁軌伝にも「陛下若欲殄滅、不可棄百済土地、余豊在北、余勇在南、百済高麗旧相党援、倭人雖遠、亦相影響、若無兵馬、還成一国」とある）のように倭人・倭国を百済遺民の連携・結合の対象になり得るとして警戒していた。それゆえ都督府は、後述のように対高句麗戦などのために倭国とも積極的な交渉を望んだのであった。

ともあれここで指摘しておきたいことは、(二)では西南地域に独立した豪族勢力が台頭し半島情勢が混乱した九世紀後半に鞠智城の役割が高まったことを言及したが、同じく西南地域(旧百済)に唐の熊津都督府が設置され半島内部が分裂していた際に、鞠智城をはじめとする倭国の山城が築城されたという点である。七世紀後半に倭国と交渉をもったのは熊津都督府の官人であり九世紀の新羅海賊と比較することは好ましくもないが、半島西南地域とのやり取りが活発化する時期に鞠智城が築城・再利用されていくことは偶然とも思われず、鞠智城の役割と直接関連していると推察できる。

二．築城以前(六・七世紀)の肥後地域と半島西南地域

有明海に面する肥後地域と半島西南地域の関係は、史資料からも菊池川流域の江田船山古墳、筑紫君磐井の時代まで遡る。まず、出土した鉄刀銘から五世紀後半のワカタケル大王(雄略天皇・倭王武)に典曹人として奉仕した火(肥)国の豪族が被葬者であることがわかっている江田船山古墳では、百済系の冠・耳飾り・履・馬具などの金属製品(前半期の金銅製品には、南海岸に注ぐ蟾津江流域の加耶系を含む)及び百済系陶質土器が多数出土している(玉名歴史研究会二〇〇二、白石二〇〇三)。また鉄刀銘を通しては、「作刀者の倭人技術者以外に「書者張安」という文筆を担う渡来人が肥後の豪族配下にいたことも窺われる。『日本書紀』には、雄略二三年(四七九)に三斤王の死後倭国から百済に帰国する東城王を高句麗から護衛するために筑紫国軍士五〇〇人を派遣したとあるなど、五世紀後半から六世紀前半に倭王権と百済が親密な対外交渉を展開し

たことを記している。この当時百済は、四七五年に高句麗の攻撃によって蓋鹵王と王都漢城を失い熊津(公州)に逃れたが、遷都後に王権強化と支配体制の整備に努めると西南部の采山江流域(慕韓とみる説が多い)を領有化し、その近くの蟾津江流域の大加耶圏の西部に進出している。学界でも議論の尽きることない全羅南道の采山江流域に前方後円墳が出現するのはこの時期である。これらの古墳(約一三基確認)は、五世紀第四四半期から六世紀第二四半期前半までの短期間に突如として現われるが、造営者・被葬者については諸説ある^{二〇}。詳細はここでは触れないが朴天秀氏や柳沢一男氏などの近年の研究では、その石室の構造、副葬品の分析等から北部九州、とりわけ肥後地域の倭人(工人)が関与したことが明らかにされている(洪濬植二〇〇六、朴天秀二〇〇七・二〇〇八、福永二〇〇七、柳沢二〇一四)。やや飛躍すれば、肥後地域・北部九州の豪族による有明海ルートを使用した交流が半島西南地域の前方後円墳(倭系古墳)の造営に繋がったとしている^{二一}。それならば豪族たちは、五世紀後半においては独自に半島西南地域との交流ルートを保持していたのである。肥後地域の豪族と近畿の氏族との関係は近年馬門ピンク石製石棺の広がりなどを通して指摘されているが(柳沢二〇一四)、倭王権の対外交渉は肥後地域など北部九州と朝鮮半島の間で築かれた地域間交流の延長線上に位置していたといえる。

そうしたなかで、肥後を含む北部九州と半島西南地域間で半ば独占的な交通網を築いた豪族に筑紫君磐井がいる。磐井の墓は、『筑後国風土記』逸文によって肥後に隣接する筑後の福岡県八女市の岩戸山古墳(八女古墳群)と考えられ、有明海一帯を中心に五世

紀後半から六世紀前半にかけて北部九州・豊国にも広がる火国の阿蘇凝灰岩を材料とした石人・石馬の分布圏が彼の勢力圏とされている（小田一九八五・一九九一、篠川二〇〇二）。広範囲なネットワークをもつ磐井による反乱は、『日本書紀』に継体二年（五二七）から翌二年（五二八）まで詳細な記録がある。乱の性格をめぐってもここでは詳述しないが多くの研究がある（山尾一九九九、佐藤二〇〇五、森公章二〇一〇、篠川二〇一〇など）。

該史料^(三)によると、筑紫国・火国・豊国を勢力基盤とした筑紫君磐井は、まず新羅との特別な関係はもとより、高句麗・百済・新羅・加耶などからの貢職船（外交使節）を招致できる立場にあったことが読み取れる。また、毛野臣との関係を示す記録や何より彼の本拠地の阿蘇凝灰岩の石製製品の広がりを通して、継体大王をはじめ西日本各地の諸勢力とも連携していたと指摘されている（水谷二〇一三）。『日本書紀』では磐井討伐を正当化するために彼の言動を反王権行為とみなすが、諸国の使節が彼のもとを訪れていることは、当時の半島勢力並びに畿内の倭王権共々が磐井をパイプに外交交渉を成立させていたことを意味する。先に述べた榮山江流域の前方後円墳の石室を造営した肥後地域の工人も、最近の研究では古墳の築造期と磐井の活動期が一致することから、百済の要請のもと磐井が派遣した集団として評価されることがある（柳沢二〇一四）。彼が賄賂を得ていた記録から新羅との関係を重視する見解もあるが（山尾一九九九）、肥後の豪族勢力と深い関係にあった半島西南地域の榮山江流域に程近い蟾津江流域では、百済と加耶諸国・背後に新羅などがしのぎを削っていた。当時北部九州と朝鮮半島をめぐる交流のルートは複数存在したようだが、磐井は有明海地域（九州中

北部）勢力のリーダーとして倭王権の百済支援を担いながら、複雑な状況下の西南地域にて倭国の対外活動を代弁していたのではない。しかし磐井は、こうしたネットワークが仇となり外交の一元化をめざす倭王権によって殺害される。つまり、磐井は倭王権を否定しておらずむしろその一端を担っていたので、反乱と言えるのかその実態が問われるが、その背後に対外交渉ルート上での王権・豪族間の対立による影響があったことは間違いない。ともあれ、磐井殺害後には倭国の対百済・西南地域との外交は田中史生氏の指摘のように王権に従属しながら行う形態に変質するが（田中一九九七・二〇〇五）、磐井の登場でクローズアップされた肥後地域の担う立場は鞠智城の築城時まで引き継がれたと推察される。

さて、磐井殺害後にはその子の葛子が跡を継ぐも筑紫君一族は弱体化し、北部九州では代わって南から肥君勢力が北上し拡大していったと考えられてきた。だが、律令期の戸籍などから筑紫国に肥君が多数存在することが確かめられる一方で、磐井の勢力圏を象徴する石人・石馬などの石製表飾が殺害後に菊池平野までを含み一層南に広がりをみせているのである。さらに次の史料には、

①百済王子恵請罷。仍賜兵仗良馬甚多。亦頻賞祿。衆所欽歎。於是、遣阿倍臣・佐伯連・播磨直、率筑紫国舟師、衛送達国。別遣筑紫火君、百済本記云、筑紫君兄、火中君弟。率勇士一千、衛送弥弓。弥弓津名。因令守津路要害之地焉。（『日本書紀』欽明一七年（五五六）正月条）五五六年に倭に滞在した百済王子恵を百済に護送するために阿倍臣らと筑紫の舟師（水軍）を派遣し、別に筑紫火君に勇士一〇〇〇人を引率させて津路要害之地を守らせたとある^(三)。このことは、六世紀中葉においても磐井を引き継ぐ筑紫火君が北部九州・倭国と百

済地域との交流の中で活躍していたことを知らせてくれる。近年の研究では筑紫火君の実体が「筑紫君児・火中君弟」であることに着目され、火中君の弟の父（母）は筑紫君であつて肥君と筑紫君の間に婚姻関係を想定し、『筑後国風土記』では両者が筑前・筑後の境界の神に共に祈っていることから当初より同盟関係にあつたと指摘されている。どちらの氏族に重きを置くかで見解の違いはあるものの、筑紫君と肥君が結びつくことで一層勢力範囲を広げたと考えている（瓜生二〇〇九、宮川二〇一三、佐藤二〇一四）。特に最近宮川麻紀氏は、対等な関係による両者の結びつきが、有明海をとりまく海上交通、八女―山鹿―菊池ラインの車路を中心とする陸上・河川交通を一層活発化させ、後代の鞠智城造営にもつながつたと推測する。ともあれ^⑨から、筑紫火君は命に従つて任務を遂行しており磐井殺害後の外交権の主体は倭王権に移つていたと考えられるが、彼らは王権の支配に組み入れられながらも磐井の築いた軍勢力（水軍）・ネットワークを引き継ぎ、百済を中心とする半島西南地域とのパイプを維持していたとみてよいだろう。

さらに、六世紀後半から七世紀の倭王権・肥後地域と百済を中心とする半島との交流形態を考えるうえで、『日本書紀』敏達一二年（五八三）条にみられる肥後の地方豪族である葦北国造阿利斯登の子日羅（く五八三）が百済の官位を有し、倭王権の外交に關与していることは興味深い（鬼頭一九七五、田中一九九七、有働二〇一四など）。これによると、六世紀初めには父の阿リス登が倭王権の大連伴金村の指示で半島南部の加耶における倭の權益を保持するためにそこに派遣されたが、日羅も倭王権の外交的使命を担い百済に派遣されたことを伝える^⑩。百済王権に仕えた倭人（倭系百済官

人）は数多くいたが（笠井二〇〇〇）、日羅は百済王から厚い信任を得て百済官位第二の達率（一六等中）にまで昇っている。百済での彼の立場を一層示すのが、倭王権が日羅を召喚するために吉備海部直羽嶋を百済に派遣し日羅と会見させた際に、日羅の屋敷の前で韓語を話す韓婦が対応し羽嶋を屋敷の中に招いた記録である。つまり日羅は百済にも屋敷をもっており、韓語を話す人たちと分け隔てなく暮らし百済王権のために尽力していた様子が読み取れる。その一方で日羅は、敏達大王の命で倭国に帰国し、父の仕えた大伴金村を「我が君」と呼び大王へ忠誠を表し、倭・済間に散在する諸問題から外交政策・国土防衛を進言しているばかりか^⑪、百済人が謀略をもつて筑紫に渡航しようとしている極秘情報を伝えるなど、倭王権と従属関係にあつたことが窺い知られる。そのことが原因か日羅は百済の使者によつて暗殺されている。ただ、日羅の倭国帰国、国政への参加は、恩率・徳爾・余怒・参官等の百済官人を伴つていたことから、倭王権が百済に送ったスパイ的立場の日羅を極秘に呼び寄せたというものではなく、互いの外交・交流形態の中で臨機応変に実現されている事例とみなし得る。

このように磐井以来日羅一族にいたるまで、肥後地域の豪族は半島西南部（特に百済）と独自のネットワークを築き対外交渉の中核を担っていた。日羅の例から窺われる交流の特質は、彼が倭王権・百済王権の二重に従属する（田中一九九七）ことによつて両王権の紐帯の役割を果たし、倭・済王権自身も九州の有力豪族の王権への二重の従属性を積極的に作り出していたことであつた。特に肥後地域がその役割を担っていて、両王権の政治・外交・文化交流がその地域との関係、人材なくしては不可能であつたことを物語る。日羅

暗殺記事をみても、参官一行は徳爾らに日羅暗殺を託して百済に帰国するが血鹿（肥前国松浦郡値嘉）を経由しようとしている。さらに、日羅を暗殺した徳爾等の百済人を捕えたあとの処罰も、倭王権自身が判断せず日羅一族の出身地の肥国葦北津に委ねている（なお、日羅の遺骸も葦北へ運ばれ改葬されている）。このことは、肥後地域及びその豪族が両王権間の媒体・経由の役割を果たしていただけでなく、ネットワーク上の主体者であったともとれる。倭王権のみならず百済王権にとっても肥後地域の勢力の援助は不可欠であつて、そうした境界勢力が当時の外交交渉を成立に導いたとみるのが実態に近いのではないか。それら豪族が半島との交流において何を対価としたのかは定かでないが、肥後地域は半島の先進文物・文化の集積地^{二〇}、外交使節・渡来人の来航・停泊地、さらには居住地であつて、それに見合ったメリットがあつたのであろう。

日羅殺害事件後も、彼の出身地である肥後国葦北と半島西南地域（百済）は恒常的な交流・対外交渉が続いたと考えられる。『日本書紀』推古一七年（六〇九）夏四月条には、

②筑紫大宰奏上言、百済僧道欣・惠弥为首、一十人、俗七十五人、泊于肥後国葦北津。是時、遭難波吉士徳摩呂・船史竜、以問之曰、何来也。对曰、百済王命以遣於呉国。其国有乱不得入。更返於本郷。忽逢暴風、漂蕩海中。然有大幸、而泊于聖帝之边境。以歡喜。

百済僧を含む百済使がここに来航した様子を記している。彼らは元々隋に向かう使節であつて漂着した百済人といえるが、暴風で流れ着くのが天草西岸や薩摩国が多いなか肥後国葦北津に来航したのは、彼らが歴史的にも百済と関係の深いことを地理的に認識していたからとみられる。推測の域をでないが下線部「泊」の語句が『日

本書紀』では外交使節の停泊地点に使用されていることを根拠に、この六〇九年の百済使もトラブルに遭い十分情報を得ていたこの場所に来航したという指摘もある（堤一九九二、有働二〇一四）。下線部のように百済使がここを聖帝之边境と評しているのは、百済人にとつてもこれを報告した倭人にとつても、葦北津は両国の境界であつたのではないか。まさにここは百済側からみれば倭国への窓口の一つであつて、②はこのルートが七世紀以後も百済使によつて恒常的に使用されていたことを示唆する。加えて、冒頭下線部は那津官家（五三六年設置）に置かれた筑紫大宰の初見記事であるが、この頃この場所を管理したのは奏上者の筑紫大宰であつたことも窺い知られる。ただし肥後地域の歴史的品格を踏まえれば、倭王権の権力が一方的に葦北津に介入したとみるよりは、肥後地域の有力豪族によるモノ・ヒト・情報を共有するネットワークの上位に那津官家・筑紫大宰が存在したと推察される。

以上、百済王権の立場に立ちつつ、六〜七世紀の肥後地域と半島西南地域の交流史を概観した。この後の肥後地域と百済の関係を述べた史料がないため断定はできないが、以降も百済王権にとつて肥後地域との交流・外交は重要視されていたとみてよいだろう。こうした交流の歴史が、後に述べる鞠智城の築城に繋がると思われる。

三、築城期（白村江直後）における熊津都督府の対倭外交とその性格

（一）熊津都督府による百済遺民の登用と対倭政策―櫛軍を中心に―
一（三）と二では時間軸が逆になったが、前者では百済滅亡後（鞠智城の築城期）に唐によつてその地域に熊津都督府が設置されたことに触れ、後者では白村江以前（築城以前の六〜七世紀）の肥後地

域と半島西南地域（百済）間の密接なネットワーク、交流史を概観した。さて後者を踏まえれば、百済地域を占領した熊津都督府の時期にも両者の間で何らかの交流があったと推察される。ここではその手がかりとして、熊津都督府による対倭政策・外交の実体を対新羅・半島政策も踏まえながら検討してみたい。

熊津都督府は、白村江勝利後の翌年の六六四年からたて続けて倭国に使者を派遣している（池内一九六〇、鈴木二〇一一bなど⁽⁷⁾）。次の記録がその初回であるが（『日本書紀』の記録は簡略であるが、『善隣国宝記』に使節の詳しい事情が記されている）、当初の外交は戦後処理の問題と絡んでおり都督府の対倭政策の方針が明確に表れていると推察される。

⑭夏五月戊申朔甲子、百済鎮將劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函与献物。……冬十月乙亥朔、宣発遣郭務悰等勅、是日、中臣内臣、遣沙門智祥、賜物於郭務悰。戊寅、饗賜郭務悰等。……十二月甲戌朔乙酉、郭務悰等罷歸。（『日本書紀』天智三年（六六四）条）

⑮海外国記曰、天智三年四月、大唐客来朝。大使朝散大夫上柱国郭務悰等卅人、百済佐平禰軍等百余人、到对馬島、遣大山中采女通信侶、僧智弁等来、喚客於別館。……一二月、博德授客等牒書一函、函上著鎮西將軍、日本鎮西筑紫大將軍牒在百済国大唐行軍總管、使人朝散大夫郭務悰等至、披覽来牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是總管使、乃為執事牒、牒是私意、唯須口奏、人非公使、不令入京、云々。（『善隣国宝記』卷上所引「海外国記」）

この史料は、倭の中央政府が対馬に来た百済鎮將（熊津都督府）の使節郭務悰らを尋問するために使者を派遣し、筑紫大宰府に呼び寄せ使節の性格・持参した牒書などをもとに入京の是非を検討した

場面である。この具体的な内容は既存の研究で詳細に言及されており（堀一九九八など）、ここでは倭王権が下した結論のみを述べれば、百済鎮將の派遣した使節は私使であつて唐皇帝の公の使人でないという理由で帰還させるというものである。この時筑紫大宰府が郭務悰らに百済鎮將宛の牒書を託していることから、倭王権は熊津都督府を大宰府と同等の機関とみなしていたという指摘もある（鈴木二〇一一b）。こうした倭王権の対応はいわば戦勝国と敗戦国の関係に反していたが、熊津都督府側はそれを責めることはせず、形だけであれ倭国の要望を聞き入れ、翌年に⑬の唐国本国の朝散大夫沂州司馬上柱国劉德高等を首席として前年度の郭務悰らを伴いながら派遣している。

⑯九月庚午朔壬辰、唐国遣朝散大夫沂州司馬上柱国劉德高等。等謂右戎衛郎將上柱国百済禰軍・朝散大夫上柱国郭務悰、凡二百五十四人、七月廿八日、至于对馬、九月廿日、至于筑紫、廿二日進表函焉。冬十月己亥朔己酉、大開于菟道。十一月己巳朔辛巳、饗賜劉德高等。十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉德高等。是月、劉德高等罷歸。是歲、遣小錦守君大石等於大唐、云々。等謂小山坂合部連石積・大小乙吉士岐弥・吉士針間、蓋送唐使人乎。（『日本書紀』天智四年（六六五）条）

ただし六六四年と六六五年の使節団の編成は、指摘されているように後者の首席の劉德高等も唐の官名を称するだけで郭務悰とほぼ同格（朝散大夫）であつて、両者とも占領軍の唐人と百済人から作られていて、若干の増員はあるが性格的に同じであつたと考えられる（鈴木二〇一一b）。使節団の主要ポストに唐人の郭務悰と旧百済官僚佐平の禰軍が二度とも加わっているのは、そのことを一層示唆する。ともあれ、⑬によるとこの時は倭国も使節団を受け入れ、さ

らに同年に遣唐使を送っている。

ここで改めて注目されるのは、兩年とも倭国に多数の百済人を派遣している点である。六六四年の際には、唐人が三〇名であるのに対して彌軍を筆頭とする百済人は一〇〇名以上加わっているのがわかる（使節団の性格が同じであるため、増員された六六五年には一層多くの百済人を派遣したであろう）。また、熊津都督府は二年後の六六七年にも送使であるが再度倭国に使節を派遣しており、

②④十一月丁巳朔乙丑、百済鎮將劉仁願、遣熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府。己巳、司馬法聰等罷歸。以小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石、為送使。（『日本書紀』天智天皇六年（六六七）十一月条）

その代表格である法聰も司馬を付しているが百済人と推察されている（池内一九六〇、盧重国二〇〇三）。後述する②⑦をみると、そこでは唐人を最初に載せその後に旧百済人の名を記しているが、百済人である「司馬彌軍」のあとにこの司馬法聰が出てきていることから、法聰は百済人であることが確かめられる。

とすれば、熊津都督府は佐平彌軍を筆頭に、旧百済人を白村江の戦後処理を担う対倭外交に積極的に活用したといえるのではない。ここから熊津都督府の対倭政策の一端が読み取れるが、何より彌軍は、『三国史記』に加えて最近公開された墓誌銘によって、旧百済地域の支配や対新羅を中心とする半島政策に一層従事していたことが窺い知られる。こうした彌軍の活動は、彼が対倭外交で期待された役割や都督府の対倭政策とも直接関係すると思われるので、その活躍の様子を確認し、改めて倭国との関係に戻ってみたい。まず次の『三国史記』では、六七〇年前後から唐（熊津都督府）と新

羅の関係が悪化した様子を詳述しているが、そうした緊迫状態を伝える中に彌軍の活動がみられるのである。

②⑤王疑百済残衆反覆、遣大阿湌儒敦於熊津都督府請和、不從。乃遣司馬彌軍窺覘。王知謀我、止彌軍不送、拳兵討百済。（『三国史記』文武王一〇年（六七〇）秋七月条）

②⑥至咸亨元年（六七〇）六月、高麗謀叛、摠殺漢官。新羅即欲発兵、先報熊津云、「高麗既叛、不可不伐。彼此俱是帝臣。理須同討凶賊、発兵之事、須有平章。請遣官人来此、共相計会。」百済司馬彌軍来此、遂共平章云、「発兵已後、既恐彼此相疑。宜令兩処官人互相交質。」（『三国史記』文武王十一年（六七二）所載・文武王「答薛仁貴書」）

②⑦……由是獲罪大朝。遂遣級湌原川・奈麻辺山及、所留兵船郎將鉗耳大侯・萊州司馬王芸・本烈州長史王益・熊州都督府司馬彌軍・曾山司馬法聰、軍士一百七十人、上表乞罪曰。（『三国史記』文武王十二年（六七二）九月条）

②⑤は、新羅側（王は文武王）からの記録であるが、熊津都督府は彌軍を新羅に派遣してスパイ行為（窺覘）にあたらせ、それを察知した新羅が彼を拘束したことを伝える。彌軍が新羅でいかなる活動をしていたかは不明だが、②⑥には文武王が六月に高句麗の反乱に対して熊津都督府と共同して討伐に当たることを申し入れたと記している。だが『三国史記』文武王一〇年（六七〇）六月条をみると、新羅が旧百済の要所である金馬渚（全羅北道益山）に六六八年に唐が滅ぼした高句麗の貴族安勝を安置したと記している。このことから、彌軍が新羅にいたのは両者の争いのためであったと推定される。そして②⑦には、六七二年九月に新羅に二年近く抑留されていた彌軍や法聰を含む、唐人と百済人を唐（都督府）に送り返したと

を記している。ともあれ上の史料を通して、彌軍らは百濟遺民でありながら都督府のなかで存亡に関わる政治・外交に関与していたことがわかる。

加えて最近「弥軍墓誌」が拓本写真と釈文であれ公開されたこと（王連龍二〇一一）、前述の外交活動に加えて墓主弥軍本人とその先祖の事績全般を知り得るようになった（東野二〇一二、李成市二〇一三、崔尚基二〇一四など^{②④}）。ここで取り上げる彌軍の対倭外交についても、一次資料の墓誌には編纂史料にみられない彼の立場・認識や彼の属した熊津都督府の実情が数多く記されている。最近の研究に倣いこの墓誌の内容を取り上げてみたいが、長文であるのでここでは彼自身の実績・生涯（内容から便宜上「1」―「4」に分けた^{②⑤}）に関わる部分のみ触れたい。

②「1」去顯慶五年、官軍平本藩日、見機識變、杖劍知歸、似由余之出戎、如金磧之入漢。聖上嘉歎、擢以榮班、授右武衛瀋川府折衝都尉。「2」于時日本餘噍、據扶桑以通誅。風谷遺賸、負盤桃而阻固。萬騎亘野、与盖馬以驚塵。千艘橫波、援原蛇而縱泳（1）。以公格謨海左、龜鏡瀛東、特在簡帝、往戸招慰（2）。公徇臣節而投命、歌皇華以載馳（3）。飛汎海之蒼鷹、翥凌山之赤雀。決河皆而天吳靜、鑿風隧而雲路通。驚鳧失侶、濟不終夕。遂能說暢天威、喻以禍福千秋（4）。僭帝一旦稱臣。仍領大首望數十人、將入朝謁。特蒙恩詔授左戎衛郎將（5）。「3」少選遷右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬。材光千里之足、仁副百城之心。舉燭靈臺器標於瓦械。懸月神府、芳掩於桂苻。衣錦晝行、富貴無革。藿蒲夜寢、字育有方。去咸亨三年十一月廿一日。詔授右威衛將軍。局影彤闕、飾躬紫陛。亟蒙榮晉、驟歷便繁。方謂克壯清猷、永綏多祐。「4」豈高曦馳易往、霜

凋馬陵之樹、川閱難留、風驚龍驤之水。以儀鳳三年歲在戊寅二月朔戊子十九日景午遘疾、薨於雍州長安縣之延壽里第。春秋六十有六。

熊津岬夷（扶余又は公州）出身の弥軍は、「1」と「4」の下線部によれば、百濟が唐に滅ぼされた顯慶五年（六六〇）に唐にくんだり官職を授けられ、その後は唐に仕えて儀鳳三年（六七八）に六六歳で亡くなっている^{②⑥}。「2」は、まさに彼の対外交渉での活躍を記した箇所であるが、既存の研究では下線部（1）の冒頭の「日本」が国号としての日本なのか議論の的となった。しかし最近李成市氏は、「日本」は唐からみた東方を意味する語句であつてすなわち百濟のことであり、その下の「扶桑」「風谷」「盤桃」のいずれも東方を指す呼称であつて、文脈を検討してみるに順に倭、高句麗、新羅を指し、全体としては「時に百濟の殘党は倭に依拠して誅罰を逃れていた。高句麗の殘党は新羅を拠点にして堅固であつた」と解釈すべきと提言している（李成市二〇一三・二〇一四）。李氏の見解は白村江以後の東アジア情勢とまさに符合しており説得力に富む。とすると、下線部（2）以下は（1）の状況を打開するために弥軍がとつた行動の内容ということになる。使者として当初の業績を述べた（3）は、彼が戦後すぐの六六四年と六六五年に倭国に派遣されたこととみてよいだろう。（3）以下は、『日本書紀』の内容を補足していて彼が使節団の中核として迅速に倭国に赴き、（4）のように戦後交渉にあつたことを伝えている。そして何より、唐皇帝が彼にそれを託した理由を、（2）のように海左（海東、すなわち百濟国）での経験を見込んでのものであつたことを明記しているのは興味深い。また、彼が対倭交渉のみならず新羅を中心とする半島政策に従事していたことは前述したが、（5）は②⑤⑦の『三国史記』の記

録とも一致するのである。さらに墓誌からは、こうした対外活動によって祢軍の官職が徐々に上昇していることもわかる。

ところで、②④の六六七年に倭に派遣された百済人の司馬法聡は熊津都督府の熊山県(熊津県とみられる)の県令に任じられていたが、「3」によると、禰軍も旧百済に帰国後は檢校熊津都督府司馬として活躍した様子が読み取れる。さらに一族(祢軍弟)の祢寔進も、「祢寔進墓誌」によって東明州の長史であったことが指摘されている(金榮官二〇一二、権憲永二〇一二)。このように多くの百済人が熊津都督府の官吏に登用されていた。白村江後の熊津都督府は、元々敵対関係にあったが同地域に精通する百済遺民を登用することによって半島支配を展開したことが窺い知られる。禰軍の例にみるように、特に倭との交渉には古くからそれと関係の深かった百済官人を積極登用したと考えられる。禰軍が都督府配下の旧百済に帰国した年は定かではないが、都督府主導で倭に派遣された六六四年にはすでに帰国していたので(扶余隆の帰国よりは後と考えられる)、唐は戦後の対倭交渉を担わせるために彼をわざわざ帰国させたともみられる。「祢軍墓誌」によると(墓誌の性格上主人公及び一族の個人的な解釈は加味されているが)、彼の対倭交渉は一定の成果を収めたといえる。

ともあれ、戦後の都督府の対倭外交は、六・七世紀百済滅亡以前の百済人と倭人の緊密なネットワークをうまく活用しようとしたと思われる。実際に対倭交渉にあたった祢軍の墓誌銘からは、そこに記された「日本」は国号を指していないことは明確であっても、都督府側が倭国を相当意識して外交にのぞんだ様子が窺い知られた。

⑩で百済鎮將劉仁軌が百済遺民と倭人の関係を案じたように、唐に

とっては倭国は敗戦国であっても、百済地域の安定した支配には対倭政策が必須であったことを物語る。そのため熊津都督府は、旧百済の対倭交渉・交流ルートを確認しようと働きかけていたと考えられる。

(二) 熊津都督府における倭人の活動と肥後地域

上では白村江以後の熊津都督府が百済遺民を介して対倭外交に従事している様子を論じた。さらに熊津都督府内には、かつて旧百済地域で活動した日羅など倭系官人のような倭人が存在したことを暗示する記録がみられる。熊津都督府は、⑪のように六六五年八月に唐勅使劉仁願の立会で熊津都督扶余隆(前百済太子)と新羅文武王の間で領土保全などを約束した会盟を実現させたが、その模様を詳述する次の『冊府元龜』をみると会盟直後に下線部のように関係のない耽羅や倭人が出てくるのである。

②⑨開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉扶余隆、盟于百済之熊津城。初百済自扶余璋与高麗連和、屢侵新羅之地、新羅遣使入朝求救、相望於路。及蘇定方既平百済軍回、余衆又叛。鎮守使劉仁願・劉仁軌等、經略数年、漸平之。詔扶余隆、及令与新羅和好。至是、刑白馬而盟。先祀神祇及川谷之神、而後歃血。其盟文曰、(中略)。劉仁軌之辞也。

歃訖、埋書弊弊於壇下之吉地、藏其盟書於新羅之廟。於是、仁軌領新羅・百済・耽羅・倭人四国使、浮海西還、以赴太山之下。(『冊府元龜』外臣部二六盟誓・高宗麟德二(六六五)年八月条)

ほぼ同様の記録は次のように他の史料にもみられる。

同盟于熊津城。劉仁軌以新羅・百済・耽羅・倭国使者浮海西還、会祠泰山。(『資治通鑑』麟德二年(六六五)八月条)

麟徳二年、封泰山。仁軌、領新羅及百濟・耽羅・倭四国酋長、赴会。

〔『旧唐書』劉仁軌伝〕

記録によると、会盟後に劉仁軌が新羅・百濟・耽羅・倭国の四カ国の使を率いて泰山の封禪の儀に赴いているのがわかる。この封禪の儀は、同史料には儀礼の様子以外に準備段階からそれら四カ国を含む諸蕃酋長が扈從を率いて行列に従駕したことも記しており、唐帝国の国威を周辺諸国にアピールすべく麟徳元年（六六六）正月に行われたのであつた。それは当時の唐を中心とする東アジア情勢・秩序を物語っているので、熊津都督府のもと倭人を同行させたことはその対倭政策を伝える重要な事例であろう。

ともあれ、八月の会盟に当事者の百濟と新羅以外に倭人などが直接参加していたとは考えられないが、当時の都督府内部地域に倭人がいたことは十分推察される。会盟をとりまく状況、会盟後の半島情勢にも倭が関係していたととれる。さて、この倭人の実体については、最初に羅濟会盟に着目した池内氏は抑留または残留した人々とみて会盟はもとより本国の倭国とは関係ない者とした。これに対しそれらを倭国から派遣された公的使節と積極的に解釈する見解も出された（木宮一九五五、日本古典文学大系一九六五、鄭孝雲一九九五）。後者の説によると、^{②③}には六六五年是歲に守君大石らを唐に遣わしたとあるが、彼らが封禪の儀にも参加したという。守君大石らを分注のように送使とみるのみならず、当初から唐本国の儀礼に参加すべく派遣された使節とみなしている。しかし、この見解は鈴木氏が実証されたように成立しがたい。^{②③}の劉徳高らの倭国派遣（九月）並びに帰国（一二月）時期をみると、その送使の守君大石一行は、同年八月の会盟に間に合わないのはもとより翌年正月

の儀礼に参加することも困難であつた。

したがって、この倭人は熊津都督府に滞在していた者たちとみて間違いない。とはいえそれらを都督府在留の倭人とみる見解の中にも、池内氏は外交と関係のない単なる在留民とみなす一方で、鈴木氏は本来的な意味において日本の朝廷の公的意思を体していた使人と評価している。ただ既存の研究では、この倭人を倭国の側に立つてのみ考えている。これまで論じたように、白村江以後六六四年から始まった対倭外交は都督府の主導によつてなされていて、唐の封禪の儀に倭人を参列させたのも都督府の意思であつた。とすれば、実際にそれを取り決めた熊津都督府の立場から在留する倭人との関係が検討されるべきであろう。

以上のように倭人は白村江以後も旧百濟地域に滞在していたが、磐井や日羅が時には百濟（新羅）王権の立場から行動したように、彼らが都督府側で何らかの活動に従事することもあつたのではない。六六四年からの戦後処理の対倭交渉も、倭人と百濟遺民の関係を軸に既存のネットワークによつて行われた部分も多かったと推察されるのである。さらにいえば倭人の地位は、百濟鎮將劉仁軌がわざわざ唐の国家儀礼に参列させたことからみて、白村江前後の都督府支配下でも低い地位ではなかったとみてよいだろう。そうした倭人の具体的な例としては次の記録が参照される。

③十一月甲午朔癸卯、对馬国司、遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人、從唐来曰（一）、唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、乗船册七隻（二）、俱泊於比知島、相謂之曰、今吾輩人船数衆、忽然到彼、恐彼防人、驚駭射戰、乃遣道文等、予稍披陳来朝之（三）。

（『日本書紀』天智一〇年（六七二）十一月甲午朔癸卯条）

やや後の六七一年であるが、唐（熊津都督府）は（１）の沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐の四人を、後述する（２）

の唐人郭務悰一行の先発隊として対馬に送り、（３）のような事情を説明させている。その一人の筑紫君薩野馬は次の記録によると、

③詔軍丁筑紫国上陽畔郡人伴部博麻曰、於天豐財重日足姬天皇七年、救百濟之役、汝為唐軍見虜。泊天命開別天皇三年、土師連富杼・氷連老・筑紫君薩野馬・弓削連元宝兒、四人、思欲奏聞唐人所計、縁無衣糧、憂不能達。（『日本書紀』持統四年（六九〇）一〇月乙丑条）

白村江の戦で捕虜となりその後熊津都督府のもとにいたことを伝えている（二二）。他の三人もほぼ同様の立場であつたとみられる。いずれにしても、都督府は百濟遺民のみならず倭人たちを自身の傘下に組み込んでいたことがわかる。③（１）のように交渉内容が対馬国司を経て筑紫大宰府に無事伝達されていることから、彼らに対倭交渉の仲介役の任をとらせていたと考えてよいだろう。沙門道久のような僧侶が含まれているのは、当時の東アジアで一般的であつた僧侶を介した外交形態とも一致している。

さらに筑紫君薩野馬は、筑紫君の一員とみられ先代は肥後地域と関係の深い筑紫火君や磐井につながる豪族であつたと思われる。岩戸山古墳の西に近接する下茶屋古墳の被葬者は薩野馬前代の親族であろうとされている（柳沢二〇一四）。もう一人韓嶋勝娑婆も、他の記録はないが韓嶋という氏からみて豊前国宇佐郡辛島郷出身の豪族と推定されている（日本古典文学大系一九六五）。すなわち二名もが、歴史的に半島西南地域（百濟）とパイプを持つ九州・肥後地域と関係の深い豪族であつたといえる。このことは、戦後の都督府

においても百濟遺民と倭人たちの旧来のネットワークをかなりの割合継承・活用したことを示している。

ところでこうした百濟遺民並びにそれと親交のある倭人を活用するスタイルは、都督府側のみならず倭国の側でも同様であつた。②③の戦後倭国が最初に唐（熊津都督府）に派遣した守君大石は、天智即位前紀八月条に百濟救援將軍の一人として名がみられ、百濟と関係の深かつた人物であることがわかる。倭国も対百濟外交に従事してきた官人を積極登用し、百濟遺民とのパイプから都督府との関係を再構築しようとしたのではないか。なお②④によると、守君大石らの倭国帰国は六六七年であつて、百濟鎮將の権限下で司馬法聰らによつて丁重に送り届けられている。とすれば、守君大石らは長期にわたり都督府に滞在していたことになり、倭国からの使節も都督府のもとで両国の関係のみならず半島政策に関わることを任されていたのかもしれない。例えば六六六年一〇月から始まる唐の高句麗征討も彼らが都督府に滞在していた時のことであつた。

ともあれ白村江以後も、筑紫君薩野馬などが都督府の意向のもと倭国との外交のなかで活発に活動していたように、歴史的な肥後地域と半島西南地域の交流は健在であつたと思われる。まさにこの時期に築城される鞠智城も、熊津都督府と倭国、肥後地域のネットワークの影響を強く受けていたと考えられる。

（三）郭務悰ら二〇〇〇人来倭と熊津都督府の対倭認識

六六四年に始まつた熊津都督府の対倭外交は、六六八年からは新羅も倭国に使者を直接派遣するようになるが（岡藤一九九七、沈京美二〇〇〇、延敏洙二〇〇三）、ある程度良好な関係を維持してい

たといえる。そうしたなか前述の③④によると、六七一年十一月に唐使の郭務悰ら二〇〇〇人の大船団が倭国に派遣されてきている。その③④(2)の解釈については既存の研究でもいくつか出されているが、使節団は郭務悰が引き連れて来た六〇〇人の唐国使節と沙宅孫登に連なる一四〇〇人による四七隻から成り立っていた。この使節団の郭務悰は、戦後最初の六六四年・六六五年の使節でも代表を務めた倭国と親密なパイプを有した半島駐在官の唐人である。また沙宅孫登は、唐將軍蘇定方が義慈王と共に洛陽に送り皇帝高宗に献上した五〇余人の百済貴族の一人であった^(三三)。沙宅氏は佐平沙宅智積をはじめとして百済王権で政治・外交の中枢にいた有力貴族である(李道学二〇一〇)。孫登も、前述の欄軍と同じようにかつての百済での能力を買われて、滅亡後は熊津都督府に登用され半島政策・対倭外交を任された百済遺民であったとみられる。それゆえ沙宅孫登が率いてきた一四〇〇人も、彼のもとにいた百済人であったと第一に考えられる。

使節団の性格については、同行した人々を百済人難民と考えたのは池内氏が最初であるが、それを発展的に解釈した鈴木氏の難民輸送説が最も有力である(井上一九八一)。鈴木氏は、新羅との対立の中で直前の同年正月に倭に派遣した李守貞の交渉^(三三)が効果をもたらさなかったため、百済避難民を届けて倭側の都督府に対する好意的態度を引き出そうとしたという(鈴木二〇一一b)。加えて近年では、派遣目的はそれと同様に緊迫する半島情勢の中で倭から支援を引き出そうというものであるが、それらを百済人ではなく倭国の関心を最も引き出した白村江の際の捕虜及び遣唐使関係者、すなわち倭人と考える見解も多くみられる(松田一九八〇、直木

一九八八、新蔵一九九〇)。ただ後者の説は、戦後の都督府と倭国の外交関係の中でそれほど大多数の捕虜が六七一年まで抑留されていたとは考えられず、万一それらが白村江で戦った捕虜であるとするれば『日本書紀』にそのことが明記されていると思われるなど、多くの点で疑問が残る。また前者の説も、百済人難民を倭国に輸送したところで倭国から賛辞が得られるのか疑問であり、何より唐人が六〇〇人含まれていた理由がもう少し明らかにされなければならぬだろう。

ひとまず、諸説でも強調された六七一年前後の半島情勢を確認しておく。^{②⑤・②⑥}を含む『三国史記』文武王十一年(六七〇)・十一年(六七一)条によると、新羅は六七〇年三月薛烏儒ら二万名を送り鴨緑江付近で勝利後、七月以降は一層熊津都督府に対する攻勢を強め、文武王自ら出征し合わせて八二城を攻略し次々と旧百済領域を奪取していった。六七一年に入ると都督府は唐本国に援軍を要請したが、新羅は中心部の加林城まで侵入し六月に石城の戦いで勝利すると、七月頃には泗泚(扶余)を占領し所夫里州を設置したという。熊津都督府からみればいわば没落したことを意味する。この後一〇月には両者は海上で激しい戦闘を繰り広げたが、

^{③②}冬一〇月六日、撃唐漕船七十余艘、捉郎将鉗耳大侯、士卒百余人、其淪没死者、不可勝数、級食当千功第一授位沙浪。(『三国史記』文武王十一年(六七一)冬一〇月条)

都督府側は漕船七〇隻以上で対抗するも新羅水軍に大敗している(徐榮教二〇〇六、李相勲二〇一一)。ただ都督府側はそれに対して黙ってみていたのではなく、『三国史記』十二年(六七二)条によると翌六七二年二月から反撃に転じており、八月には韓始城・馬邑

城などを攻めて京畿道・黄海道一帯で衝突し新羅軍を破り、九月には②⑦にみられるように新羅王が謝罪使を遣わし捕虜を送還したのであった。なお、この捕虜の中に山東半島に位置する萊州の司馬王芸がいたことから、上の③②の新羅に敗れた唐水軍は、唐本国から熊津都督府に向かう兵士・軍事物資を乗せた輸送船団であったという主張もみられる（李相勲二〇一一）。

ともあれ、郭務悰ら二〇〇〇人はそうした半島情勢の中で倭国に派遣されたのであった。繰り返しになるが既存の見解では、大船団の実体として難民と捕虜の違いはあるが、熊津都督府は数か月前の正月に次のように上表文まで持たせた使節を遣わしたものの、

③③百濟鎮將劉仁願、遣李守真等上表。・秋七月丙申朔丙午、唐人李守真等百濟使人等、並罷歸。（『日本書紀』天智一〇年（六七二）条）

倭国の反応が思わしくなかったのでさらなるアピールを目指したとされている。つまりそれらは、新羅との戦闘のために倭の軍事的支援を引き出すための手段であったという解釈である。しかしながら、唐は戦後当初より倭国に対して関係を修復しようとしたが、自身の敗戦国という認識は強く持っていたと考えられる。既存の見解は、当時の熊津都督府の対倭認識とかけ離れた説であって、日本古代史の立場から倭国を過大評価したものと見える。とすれば、この二〇〇〇人も倭国を喜ばせる避難民や捕虜と考えられないのはもとより、これを再考することで派遣した側の熊津都督府の対倭政策・認識は一層明らかになると思われる。

ここで改めて③④（三）をみると、二〇〇〇人の装いとして対馬の防人が襲撃してもおかしくなかったことを伝える。すなわち使人の風貌とは異なり武装した船団であったことが窺い知られる。これ

は、③②に描かれる新羅水軍と激突して敗れた唐水軍と同等な様相を彷彿とさせる。③④（四七隻）と③②（七〇隻）は船団の数も比較的近く、古く森克己氏などによって提起されたような軍人説（森一九五五、鈴木治一九九五）は十分成り立つと考えるのである。しかし先に指摘しておきたいが、森氏などが主張するように倭国を威嚇するための軍人集団であったとは到底考えられない。このことは先学の指摘の通りであるが、次の記録のように、

③④遣内小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等。於是、郭務悰等、咸着喪服、三遍举哀。向東稽首。壬子、郭務悰等再拜、進書函与信物。（『日本書紀』天武元年（六七二）春三月条）

郭務悰らは来倭後書函と信物を進めて修好を結ぶことに努めており、天智大王が死去し筑紫に滞在する使節にそれを告げた際には彼らも哀悼の礼を行うなど、武力による威嚇ととれるような行為は一つもみられない。このときの書函の文は『善隣国宝記』^{（三）}のなかにみられ、のちの呼称である「日本国天皇」を記すなど後世の潤色も含まれているが、都督府が外交形式に則って郭務悰らを派遣したことを示唆する。加えてこのときの信物は、『日本書紀』持統六年閏五月己酉条に「詔筑紫大宰率河内王等曰・復上送大唐大使郭務悰爲御近江大津宮天皇所造阿弥陀像」とあることから、郭務悰らは天皇に贈るために阿弥陀像を持参してきたことが窺い知られる。

当時の東アジアでは外交のなかで仏教の果たす役割は強く、精神的にも倭国から賛同を得ようとしていたと推察される（近藤二〇一四）。鞠智城でも築城期の遺構から七世紀代の百済系の小金銅仏（金銅菩薩立像）が出土しているが、熊津都督府との外交・交流の中でこのように伝来した可能性もあり得る。ともあれ、

二〇〇〇人の実体が軍人（都督府水軍）であつたとしても、倭国を攻撃したり威圧するものでなかつたことは明白である。

再度、軍人説にたちこの使節団の性格を考えてみる。上に指摘したように、沙宅孫登ら旧百済官人のみならず倭人を登用し彼らに水先案内、実務的な交渉を任せていたことが、当時の熊津都督府と倭国との間の外交の実体であつた。それら倭人は、筑紫君薩野馬・韓嶋勝婆婆は有明海を含む北部九州とネットワークを有した氏族であつて、僧侶の沙門道久を含めて旧来から交渉能力に長けていた者であつた。しかも都督府側は、防人の位置まで十分認識しているなど、

日本の防衛体制を熟知していたとみられる。とすれば、この大船団は半島情勢、新羅との戦闘のなかで派遣されたのであつたが、ある程度周到な準備のもとで成し遂げられていたといえる。すなわち、六六四年から始まる対倭外交の中で何らかの取り決めがなされていて、想定外の出来事とはいえなかつたのではないか。大船団を率いてきた郭務棕も書函・仏像など信物を持参するなど倭国側にこの使節を受け入れてもらうように善意を示しており、倭国側も次のように急がず無難に対応しているのが確かめられる。

③⑤ 以甲冑弓矢、賜郭務棕等。是日、賜郭務棕等物、総合絶一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。（『日本書紀』天武元年（六七二）夏五月壬寅条）

この③⑤でやはり注目されるのは、大量の絶・布・綿より先に武器（武具）である甲冑・弓矢をまず供給している点である。これはまさに彼らの実体が兵士であることを物語っている。ここで改めて問題になるのが③⑥（二）の「送使」の語句の解釈である。鈴木氏はこの部分について国史大系本以外に各諸本を入念に精査され、「送使」

はもともと寛文九年の底本では「送」のみであつたのが、後に校訂者が四人の帰国と関連させて倭人たちの「送使」とするのがよいということ。「使」を加えたと指摘する（鈴木二〇一b）。ゆえに鈴木氏はこの部分を「郭務棕ら唐人六〇〇人が沙宅孫登ら百済人一四〇〇人を送る」と解釈するが、これには私もほぼ同意する。ただ私は、倭国に送つた側は唐人（都督府官人）であつても、送られたのは百済人避難民ではなく、唐人を主体とする多数の百済人の兵士であつたと考えておきたい。

以上を踏まえると、この時都督府側は倭国を後背基地として期待（ある程度そのように認識）していたのではないか。六七一年一月に倭国に兵士を送つたのも、同年の新羅との戦闘（特に③②の海上での敗戦）によるものとみられ、倭国を拠点に体制を整え再起をはかろうとしたと推察される。その甲斐もあつてか、唐側は翌年に入ると攻撃に転じており新羅から謝罪（②⑦参照）をとりつけている。白村江勝利直後から唐（熊津都督府）が倭国と交渉をもつたのは、戦勝国としての半島支配に付随した対倭政策の一環であつて、旧百済の半島西南地域と倭国の歴史的なルートを押さえることで、とりわけ有事の際などに敗戦国の倭国を利用しようと当初から考えていたためといえる。とすれば、肥後地域に築城された鞠智城も都督府が対倭外交を展開する上で多くの役割を果たしたと推察される。

むすびにかえて―半島勢力の対倭（日）交通と鞠智城、古代山城―

鞠智城が築城された当時及びそれが再利用された時期の朝鮮半島では、西南地域に唐の熊津都督府、豪族政権というような独立した政治勢力が形成されたが、このことは鞠智城の築城背景並びに役割・

機能を考える上で非常に重要である。鞠智城の位置した肥後地域・北部九州は、磐井や日羅などに代表されるように六世紀から七世紀にかけての交流の所産によって、半島西南地域（旧百済）からのモノ・ヒト・情報を日本列島のなかで最も早くリアルに体感するところであった。百済滅亡後唐によって旧百済に熊津都督府が設置されると、半島勢力とネットワークを有した豪族は倭国内でもいち早く対処に迫られたが、白村江の敗戦の直後は危機感がピークに達したと考えられる。それに対し唐の熊津都督府は、白村江直後の翌年から倭国と戦後処理をめぐる交渉をスタートさせていた。そのなかで戦後の都督府は、旧百済官人はもとより倭人を積極登用して旧来からの両者のネットワークを活用した外交を展開しており、その中核には肥後地域の豪族も存在したことを本稿では指摘した。

最初に述べたように既存の研究では、白村江後の倭国に築かれた古代山城の機能は、唐・新羅に対する軍事防衛（大宰府の後背基地を含む）にあったとされ、さらに鞠智城はそれに加えて、存続期間や立地環境・出土遺構を根拠に対隼人政策を含む倭王権の地域支配との関係が強く指摘された。しかしながら、肥後地域の豪族と半島勢力の歴史的な交流及び築城期の熊津都督府の対倭外交の動きをみると、鞠智城の築城並びにその後の役割には、両地域の実情とそれに対する倭王権の対外活動が密接に絡み合っていたのであった。まず、戦後の倭王権がとった半島情勢への対応は現地の豪族たちの動向に関わっていて、肥後地域に諸機能を備えた鞠智城が構築されたのも、倭王権の一方的な意思よりは彼らの働きかけが想定される。さらに指摘したいのは、百済王権・官人とネットワークを有した筑紫君・日羅一族などを通じた両地域の交流史を考慮すれば、彼ら豪

族は倭王権のみならず新たに置かれた熊津都督府に対しても対外的危機の解消と交通の安定を求めたとは考えられないだろうか。境界に位置する彼らは、日羅暗殺以後も倭王権の地域支配システムを取り入れながらも、半島との交流により様々な恩恵を得ていたと推察されるのである。

それならば鞠智城は、唐・半島勢力に対する防衛施設の役割はそれほど担っていなかったことになる。山城を築城したのは倭王権ではなく倭国を占領した唐軍であるという異説（田辺一九八三）^{（二四）}のなかでは指摘されたりしたが、戦後の唐・倭交渉で山城の築城が倭国の問題行動としてあがっていないのは、少なくとも熊津都督府は倭国の山城に対し反唐を示す軍事拠点としては認識していなかったように思われる。倭王権が設置した山城の機能に軍事的な目的が含まれていたことは否定しないが、山城が戦後の熊津都督府の対倭外交に対して威嚇する場面がみられないのも、半島勢力と深いネットワークをもつ地域に築かれた鞠智城などの古代山城は、むしろ双方の勢力・地域間の交流・外交を促進させたともみられる。最初に触れたように最近の調査研究によって多くの未完成の山城の存在が明らかにされ^{（二五）}、山城本来の目的も「見せること」にあったという見解もみられる。それらを念頭に置くと山城の機能としてまず重要なことは、白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在であって、倭国と半島勢力の間の旧来からのネットワークを把握することにあつたのではないか。したがって、倭国内の山城造営には築城期に対倭交渉を推進した熊津都督府とも何らかの合意がなされていて、山城の機能には軍事的な側面（軍事防衛が最優先であつた山城もあろう）以上に対外交渉の場としての

面があったと考えられる。本稿で指摘したように、六七一年に都督府は新羅との戦いの敗戦から再起をはかるため倭国に多数の船団を遣わしているが、唐は戦後当初より倭国に対し半島占領のための後背基地（食糧や武器の補給場所）としての活用を考えていたようであった。それゆえ半島交通の要地に築城された鞠智城などの古代山城は、熊津都督府からみても対倭政策の一端を担う場所であったとみてよいだろう。

さらに言えば、古代越後・東北の城柵において蝦夷・渤海との間で交易がなされたように（熊谷二〇〇四、武田二〇〇五など）、とりわけ半島西南地域と深い交流史をもち先進文物・文化が集積した肥後地域に築かれた鞠智城などでは、交易拠点の側面を併せ持っていたと推察される。時代は九世紀後半に下るが、半島西南地域で豪族勢力が台頭しその配下の海上勢力（海賊）が肥後地域に來航するのに合わせて城の役割が高まり再利用期を迎えたのは、鞠智城のもつ軍事・外交的機能に加えて当初から交易の場であった側面を強く想起させる。また、一（一）で若干触れたⅡ期（七世紀末～八世紀第一四半期前半）に高句麗・新羅など古代朝鮮に起源をもつとされる八角形建物が発見された背景や、八世紀に入り（六九八年以降）南方の対倭人政策の拠点として鞠智城が活用されたとみられることにも、鞠智城のもつ対外交通の機能と半島情勢が関係していると推察されるのである。

これらについては紙幅の関係上割愛せざるを得ないが、朝鮮半島ではこの後、旧百済のネットワークを引き継ぐ熊津都督府が没落し羅唐戦争に勝利した新羅が六七六年に半島から唐を追い出し、慶州を都とする統一新羅の時代を迎えた。ところで半島の八角形建物

は、その起源及び性格をめぐっては諸説あるが最近の調査研究によれば、年代の古い高句麗の事例を除いてはその大半が新羅領域の遺跡（慶州羅井・河南市二聖山城・安城市望夷山城・全南務安郡良将里遺跡など）から発見されていることが窺い知られる（崔光植二〇〇六、李陽浩二〇一四、田中二〇一四）^{二五}。それゆえ鞠智城の八角形建物の源流も、ひとまず新羅（新羅にその文化を伝えた高句麗）にもとめることができる。詳細は述べないが新羅も、熊津都督府と対抗するため六六八年以降倭国に使節を派遣するようになった。統一期前後（とりわけ統一直後）は、倭（日本）に擦り寄る緊密な外交関係を展開していて、それは九州地域にも影響を及ぼしたと考えられている（岡藤一九九七）。すなわち、六七六年前後には肥後地域と交流する半島勢力の主体も熊津都督府から新羅に移行したことを意味するが、まさにこの時期鞠智城に八角形建物が建立されているのである。両者の関係は偶然とも思われず、新羅との交流史を含めて再検討する必要がある^{二六}。さらに、新羅は八世紀前半までに支配体制を確立するが、対倭外交は王都近郊の蔚山湾港を拠点になされたとみられるので（濱田二〇一二）、半島西南地域と肥後地域の交流は七世紀末から次第に減少したと考えられる。それに合わせて、鞠智城の役割も既存の余力を南方の倭人対策などに向けられるようになったのかもしれない。

以上、憶測を重ねた部分が多かったが、鞠智城は肥後地域と朝鮮半島に展開した交流史をバックグラウンドに築城され、白村江後の緊迫した熊津都督府と倭王権の間で展開した対外交通の一端を担っていた。したがって、鞠智城など古代山城を介したネットワークは、倭（日本）の都から瀬戸内・九州を経て半島の王都（さらには唐）

までを結んでいたのであり、そこには国家形成期の倭王権と熊津都督府を含む朝鮮半島の諸王権の間における諸課題が含まれていたといつて過言ではない。

注

- (一) 古代山城の文献史料については、鈴木拓也二〇一一「文献史料からみた古代山城」『条里制古代都市研究』一六を参照。
- (二) 大宰府馳駟奏言、肥前国基肆郡人川辺豊穂告、同郡擬大領山春永語豊穂云、与新羅人弥實長、共渡入新羅国、教造兵器器械之術、還来将撃取对馬島。藤津郡領葛津貞津・高来郡擬大領大刀主・彼杵郡人永岡藤津等、是同謀者也。仍副射手册五人名簿進之。
- (三) 『日本三代実録』貞観二年(八六九)一〇月二六日条
- (四) 『日本三代実録』貞観二年(八七〇)十一月三日条
- (五) 『日本三代実録』貞観五年(八七三)五月廿七日条・七月八日条
- (六) 『日本三代実録』仁和元年(八八五)六月廿日癸酉条
- (七) 『唐会要』百濟伝・『資治通鑑』高宗顯慶五年(六六〇)八月条など
- (八) 『三国史記』文武王三年(六六三)夏四月条・『旧唐書』新羅伝
- (九) 各州県の位置は、末松一九九六・鄭求福他一九九七を参照。
- (一〇) 研究史及び諸説の概要は朴天秀二〇〇七を参照。
- (一一) 全羅南道の倭系古墳の被葬者を、国際交易を担った交易集団とする見解もある(金洛中二〇〇二「五〜六世紀の柴山江流域における古墳の性格」『前方後円墳と日朝関係』同成社)。
- (一二) 筑紫国造磐井、陰謀叛逆、猶預経年。恐事難成、恒伺間隙。新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍。於是、磐井掩扼火豊二国、勿使修職。外邀海路、誘致高麗・百濟・新羅・任那等国年貢職船、内遮遣任那毛野臣軍、乱語揚言曰、今為使者、昔為吾伴、摩肩触肘、共器同食。：『日本書紀』繼体二年(五二七)六月条。

(一三) この時期は百済と新羅の対立が激化し、百済の聖明王が戦死するという緊迫した状況下であった。

(一四) 日羅が百済に派遣された理由は、「任那問題」に関連して百済との関係悪化の防止の視点から論じられることが多かったが、肥後地域と百済の地域間交流の視点からの検討が必要であろう。

(一五) 有働二〇一四は、『日本書紀』にみられる「毎於要害之所、堅築壘塞矣每」を鞠智城につながる山城造営の計を進言したと推測する。当時百済では都城を中心に山城が築かれていたため、日羅が百済の山城築城技術を伝えた可能性は十分あり得る。ただその後八〇年近く山城が築かれていないのを見ると、白村江後の山城に結びつくかは定かでない。

(一六) 有働二〇〇八は、豊国の八幡神の成立も百済から肥後に伝来した仏教が肥後経由で豊国に伝えられた影響であるという。興味深い指摘である。

(一七) その他には、木宮一九五五、森一九五五、松田一九八〇、鬼頭一九八一、直木一九八八、森一九九八・二〇〇六、新蔵一九九〇、鄭孝雲一九九五、大庭一九九六、堀一九九八、沈京美二〇〇〇、延敏洙二〇〇三、中野二〇一〇、李道学二〇一〇、李成市二〇一四などを参照。

(一八) 荊木二〇一二、葛継勇二〇一二、金栄官二〇一二、権恵永二〇一二、拝根興二〇一二、西本二〇一三、金子二〇一三、金英心二〇一四。なお、陝西省西安市長安区郭杜鎮からは、彌寔進、彌素士、祢仁秀という百済から唐に帰順した彌氏三代とみられる家族墓三基と墓誌が発見されている(金栄官二〇一二)。「祢軍墓誌」もこの付近で出土したと推定されており、これら四つの墓誌の総合的な検討が必要である。

(一九) 全体の釈文は、古代東アジア史ゼミナール二〇一二「祢軍墓誌訳注」『史滴』三四・葛継勇二〇一二・崔尚基二〇一四を参照。

(二〇) 祢軍は、六三三年ごろ泗沘(扶余)で生まれ、六三〇年代に武王との関係を通じて百済の政界に進出したと推定されている(金栄官二〇一二)。

(二一) この記録は、持統四年(六九〇)九月に帰国した大伴部博麻に褒賞を与えた際の詔である。この内容によると、博麻の尽力により筑紫君薩野馬らは天智三年(六六四)に解放され、その時帰国したとも解釈できなくな

い。それならば、薩野馬は六七一年までの間に再度半島の都督府配下に渡っていた可能性も想定できることになる。

- (二二) 百濟王義慈、其妻恩古、其子隆等、其臣佐平千福・国弁成・孫登等、凡五十余、秋七月一三日、為蘇將軍所捉、而送去於唐国(『日本書紀』齊明六年(六六〇)冬一〇月条)。加えて『日本書紀』齊明六年(六六〇)秋七月条の「伊吉連博德書」には、沙宅孫登の名はみられないがこの一行が皇帝の恩勅で釈放されたことを記している。

- (二三) 天智天皇一〇年、唐客郭務悰等來聘書曰、大唐帝敬問日本国天皇、云云、天武天皇元年、郭務悰等來、安置大津館、客上書函題曰、大唐皇帝敬問倭王書、又大唐皇帝勅日本国使衛尉寺少卿大分等書曰、皇帝敬到書於日本国王(『善隣国宝記』卷上天智天皇一〇年(六七二)条)。

- (二四) 田辺一九八三は、白村江敗戦後に倭国内に築城された山城を、戦後の米軍が日本占領に伴い米軍基地を設置したように、唐帝国が倭国を支配するために百濟の傀儡勢力を利用して倭の中央政府を囲むように設置した施設とみている。この説は引用されることはほとんどなく疑問点も多いが、出宮二〇一三では肯定的にみている。

- (二五) 未完成と推測されるものは、朝鮮式山城では六遺跡中二遺跡、神籠石系山城では一六遺跡中六遺跡以上であるとされている(亀田二〇一四)。

- (二六) 李陽浩二〇一四では、東アジア地域で出土した八角形建物に対し、最近の発掘調査の成果を含めて建築史の視点から詳細に整理している。このデータは今後の研究の道標になる。なおその性格をめぐっては、鼓楼などの軍事施設、仏教関連の円堂・円塔、天地壇・廟などの祭祀施設、さらには道教関係までいくつか提示されている。最近の研究では祭祀建物とみる説が有力である(崔光植二〇一六)。

- (二七) 日本の壬申の乱後の律令国家形成に当時の新羅との外交が直接影響を与えたという指摘は古くからあるが(鈴木靖民一九八五「对新羅関係と遣唐使」『古代対外関係史の研究』吉川弘文館)、最近の研究によれば当時形成された日本の文字文化や仏教・祭祀などの思想文化も、新羅の影響を強く受けていたことが文字資料を通して具体的に指摘されてきている。

る(鈴木靖民二〇一一「古代東アジアのなかの日本と新羅―文字文化の受容―」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館・橋本繁二〇一四「韓国国簡論―漢字文化の伝播と受容―」『岩波講座 日本歴史第二〇巻地域編 岩波書店』)。本稿では紙幅の関係で論じられなかったが、鞠智城の八角形建物についても新羅との交流史を含めて再稿を期したい。加えて憶測にすぎないが、倭国で同時期に築城された山城の大半が八世紀以降に機能していないのに反して鞠智城が一〇世紀初まで維持されたのは、八角形建物を建立し新羅との交流を維持したことも関係があるのかもしれない。

参考文献

- 相原嘉之 二〇〇四「倭京の「守り」」『明日香村文化財調査研究紀要』四
池内 宏 一九六〇「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係」『満鮮史研究 究上世第二冊』吉川弘文館
石井正敏 二〇一二「東アジア史からみた鞠智城」『鞠智城シンポジウム 二〇一二成果報告書』熊本県教育委員会
磯村幸男 二〇一〇「西日本の古代山城」『史跡で読む日本の歴史三 古代国家の形成』吉川弘文館
井上光貞 一九七五「大化改新と東アジア」『岩波講座 日本歴史二』岩波書店
荊木美行 二〇一二「祢軍墓誌の出現とその意義」『皇學館論叢』四五
有働智英 二〇〇八「豊国における仏教伝来と八幡神の諸問題」『大分県地方史』二〇二
有働智英 二〇一四「古代肥後における仏教伝来―百濟達率日羅と鞠智城出土遺物を中心として―」『鞠智城と古代社会』二
瓜生秀文 二〇〇九「筑紫君磐井の乱後の北部九州」『日本古代の思想と筑紫』
欽歌書房
延敏洙 二〇〇三「統一期の新羅と日本の関係―公的交流を中心に―」『古代韓日交流史』ヘアン
王連龍 二〇一一「百濟人『祢軍墓誌』考論」『社会科学戦線』七月号

大庭 脩 一九九六『古代中世における日中関係史の研究』同朋舎出版

岡藤良敬 一九九七『七世紀中葉～九世紀の日羅関係―九州地域史の視点から―』

『福岡大学人文論叢』二八

岡田茂弘 二〇一〇『古代山城としての鞠智城』『古代山城鞠智城を考える』

二〇〇九年東京シンポジウムの記録』山川出版社

小田富士雄編 一九九五『石人石馬』学生社

小田富士雄編 一九九一『古代を考える磐井の乱』吉川弘文館

小田富士雄 二〇一二『鞠智城の創設について』『鞠智城シンポジウム二〇一二』

成果報告書』熊本県教育委員会

葛継勇 二〇一二『祢軍墓誌』についての覚書』『東アジア世界史研究センター』

年報』六

狩野 久 二〇〇五『山城と大宰・総領と「道」制』『永納山城跡』西条市教育委員会

柿沼亮介 二〇一四『朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠智城』『鞠智城と古代社会』二一

笠井倭人 二〇〇〇『欽明朝における百済の対倭外交』『古代の日朝関係と日本』

書紀』吉川弘文館

金子修一 二〇一三『禰氏墓誌と唐朝治下の百済人の動向』『日本史研究』

六一五

亀田修一 二〇一四『古代山城は完成していたのか』『鞠智城跡Ⅱ論考編―鞠智』

城跡第八く三二次調査報告』熊本県教育委員会

蒲生京子 一九七九『新羅末期の張保皋の台頭と反乱』『朝鮮史研究会論文集』一六

鬼頭清明 一九七五『日本民族の形成と国際的契機』『大系日本国家史―古代』

東京大学出版会

鬼頭清明 一九八一『白村江東アジアの動乱と日本』教育社歴史新書

本宮泰彦 一九五五『日華文化交流史』富山房

木村龍生 二〇一四『鞠智城の役割に関する一考察―熊襲・隼人対策説への反論―』『鞠智城跡Ⅱ―論考編1―』熊本県教育委員会

金栄官 二〇一二『中国発見百済遺民禰氏家族墓誌銘の検討』『新羅史学報』二四

金英心 二〇一四『遺民墓誌からみた高句麗・百済の官制』『韓国古代史研究』七五

金甲童 二〇一〇『高麗の後三国統一と後百済』書景文化社

熊谷公男 二〇〇四『蝦夷の地と古代国家』山川出版社

熊本県教育委員会(坪井清足・佐藤信・亀田修一・木本雅康・海野聡・西住欣一郎・

矢野裕介・木村龍生・能登原孝道) 二〇一四『鞠智城跡Ⅱ―論考編1―』

権恵永 二〇一二『百済遺民禰氏一族墓誌銘に対する断想』『史学研究』一〇五

洪潜植 二〇〇六『韓半島南部地域の倭系要素―三～六世紀を中心に―』『韓国』

古代史研究』四四

近藤浩一 二〇〇五『九世紀中葉・聖住寺と新羅王京人の西海岸進出』『入唐』

求法巡礼行記』に関する文献校定および基礎的研究』科研費報告書

近藤浩一 二〇〇六『新羅末期の王土思想と社会変動―崔致遠の『四山碑銘』』

の検討を中心に―』『東京大学日本史学研究室紀要』一〇

近藤浩一 二〇一四『東アジア海域と倭寇―九世紀末の新羅海賊との比較史的』

考察を通して―』『京都産業大学論集』四七

近藤浩一 二〇一四『六世紀百済の思想的基盤と天下観の形成』『京都産業大学』

日本文化研究所紀要』一九

崔光植 二〇〇六『韓・中・日古代の祭祀制度比較研究―八角建物址を中心と』

して―』『先史と古代』二七

崔尚基 二〇一四『祢軍墓誌』の研究動向と展望―韓・中・日学界の議論事項』

を中心に―』『木簡と文字』一二

笹山晴生 二〇一〇『鞠智城と古代の西海道』『古代山城鞠智城を考える』

二〇〇九年東京シンポジウムの記録』山川出版社

佐藤 信 二〇〇五『六世紀の倭と朝鮮半島諸国』『日韓歴史共同研究報告書(第』

I期)』

佐藤 信 二〇一四『鞠智城の歴史的位置』『鞠智城跡Ⅱ―論考編1―』熊本県教育』

委員会

篠川 賢 二〇〇一『大王と地方豪族』山川出版社

篠川 賢 二〇一〇『日本列島の西と東』『日本の対外関係1』吉川弘文館

徐栄教 二〇〇六『羅唐戦争史研究―弱者が選択した戦争』亜細亜文化社

末松保和 一九九六『百済の故地に置かれた唐の州県について』『高句麗と朝鮮』

古代史末松保和朝鮮史著作集三』吉川弘文館

鈴木 治 一九九五『白村江―古代日本の敗戦と薬師寺の謎』学生社

鈴木靖民 二〇一〇 a「七世紀後半の日本と東アジアの情勢―山城造営の背景―」

『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館

鈴木靖民 二〇一〇 b「百済救援の没後の日唐交渉―天智紀唐関係記事の検討―」

『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館

成周鐸 一九九九『韓国古代山城の日本伝播』『国史館論叢』二二

蔡雄錫 二〇〇〇「新羅下代の社会変動と富豪層の登場」『高麗時代の国家と地方社会』ソウル大学校出版部

白石太一郎 二〇〇三「二つの古代日韓交渉ルート」『熊本古墳研究』創刊号

申虎徹 一九九三『後百済甄萱政権研究』一潮閣

全北伝統文化研究所編 二〇〇一『後百済甄萱政権と全州』

武田佐知子 二〇〇五『古代環日本海交通と淳足樫』『律令制国家と古代社会』

塙書房

田中史生 一九九七「帰化人」論神考―古代における人の王権・国家への帰属

の問題―『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房

田中史生 二〇〇五『倭国と渡来人―交錯する「内」と「外」』吉川弘文館

田中俊明 二〇一四「朝鮮三国における八角形建物とその性格」『鞠智城跡Ⅱ―

論考編2―』熊本県教育委員会

田辺昭三 一九八三『よみがえる湖都―大津の宮時代を探る―』日本放送協会

玉名歴史研究会編 二〇〇二『東アジアと江田船山古墳』雄山閣

沈京美 二〇〇〇「新羅中代の対日関係に関する研究」『統一新羅の対外関係と

思想研究』白山資料院

鶴嶋俊彦 一九九七「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』七

鶴嶋俊彦 二〇一〇「古代官道車路と鞠智城」『古代東アジアの道路と交通』勉

誠出版

鄭求福他 一九九七『訳注三国史記注釈編（下）』韓国精神文化院

鄭淳一 二〇一〇「貞観年間における弩師配置と新羅問題」『早稲田大学大学院

文学研究科紀要』四

鄭淳一 二〇一〇「寛平新羅海賊考」『史観』一六四

鄭清柱 一九九六『新羅末高麗初豪族研究』一潮閣

出宮徳尚 二〇一三「古代山城のフォーメイションと鞠智城」『鞠智城シンポジ

ウム二〇一三成果報告書』熊本県教育委員会

東野治之 二〇一二「百済人祢軍墓誌の『日本』」『図書』七五六

戸田芳実 一九九一「平安初期の五島列島と東アジア」『初期中世社会の研究』

東京大学出版会

直木孝次郎 一九八八「近江朝末年における日唐関係」『古代日本と朝鮮・中国』

講談社

中野高行 二〇一〇「天智朝の帝国性」『日本歴史』七四七

新蔵正道 一九九〇「白村江の戦」後の天智朝外交』『史泉』七一

西本昌弘 二〇一三「祢軍墓誌の『日本』と『風谷』」『日本歴史』七七九

西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二〇一二『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八、

三二次調査報告―』熊本県文化財調査報告第二七六集

西谷 正 一九九四「朝鮮式山城」『岩波講座日本通史三』岩波書店

西谷 正 二〇一〇「朝鮮半島から見た鞠智城」『平成二二年度鞠智城東京シ

ンポジウム資料』熊本県教育委員会

日本古典文学大系 一九六五『日本書紀下補注』岩波書店

仁藤敦史 二〇一〇「七世紀後半の領域編成―評と大宰・総領―」『日本歴史』

七四八

能登原孝道 二〇一四「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城跡Ⅱ―論考

編1―』熊本県教育委員会

拝根興 二〇一二「当代百済遺民禰氏家族墓誌に関する考察」『韓国古代史研究』

六六

濱田耕策 二〇〇二「王権と海上勢力―特に張保皐の清海鎮と海賊に関連して―」

『新羅国史の研究―東アジア史の視点から―』吉川弘文館

濱田耕策 二〇一〇「朝鮮古代史からみた鞠智城―白村江の敗戦から隼人・南

島と新羅海賊の対策へ―」『古代山城鞠智城を考える』山川出版社

濱田耕策 二〇一二「新羅の東・西津と交易体制」『史淵』一四九

福永伸哉 二〇〇七「継体大王と韓半島の前方後円墳」『福勝寺古墳の研究』大阪大学文学研究科

平成二四年度鞠智城跡「特別研究」(大高広和・貞清世里・早川和賀子・古川順大・宮川麻紀)二〇一三『鞠智城と古代社会』一

平成二五年度鞠智城跡「特別研究」(有働智英・小澤佳憲・柿沼亮介・菊池達也・古内絵里子)二〇一四『鞠智城と古代社会』二

方香淑 一九九四「百濟故土に対する唐の支配体制」『李基白先生古稀紀念韓國史学論叢(上) 古代篇』韓國史学論叢刊行委員会

朴芝賢 二〇一三「熊津都督府の成立と運営」『韓國史論』五九

朴天秀 二〇〇七『加耶と倭韓半島と日本列島の考古学』講談社

朴天秀 二〇〇八「采山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」『古代日本の異文化交流』勉誠出版

水谷千秋 二〇一三『継体大王と朝鮮半島の謎』文藝春秋

松田好弘 一九八〇「天智朝の外交について―壬申の乱との関連をめぐって―」『立命館文学』四一五〜四一七

宮川麻紀 二〇一三「鞠智城築城の背景―肥君の拠点と交通路の複眼的検討―」『鞠智城と古代社会』一

森 克己 一九五五『遣唐使』至文堂

森 公章 一九九九『白村江以後』講談社選書

森 公章 二〇〇六『戦争の日本史―東アジアの動乱と倭国―』吉川弘文館

森 公章 二〇一〇「古代王権の成長と日韓関係―四〜六世紀―」『日韓歴史共同研究報告書(第Ⅱ期)』

向井一雄 二〇〇九「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝渚』一四

向井一雄 二〇一〇「駅路からみた山城―見せる山城論序説―」『月刊地図中心』四五三

八木 充 二〇〇八「百濟滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』七二二

柳沢一男 二〇一四『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』新泉社

山内晋次 二〇〇三「九世紀東アジアにおける民衆の移動と交流―寇賊・反乱を主な素材として―」『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館

山尾幸久 一九九九『筑紫君磐井の戦争東アジアのなかの古代国家』新日本出版社

李基東(近藤浩一訳) 二〇〇一「張保臯とその海上王国」(上)(下)『アジア遊学』二六・二七

李相勲 二〇一二「新羅水軍の活動と制海権掌握」『羅唐戦争研究』周留城

李成市 二〇一三「祢軍墓誌研究―祢軍の外交上の史跡を中心に―」『木簡と文字』一〇

李成市 二〇一四「六〜八世紀の東アジアと東アジア世界論」『岩波講座 日本歴史第三卷古代三』岩波書店

李道学 二〇〇八「新羅末・甄萱の勢力形成と交易」『新羅文化』二八

李道学 二〇一〇「熊津都督府の対日本政策」『百濟泗泚城時代の研究』一志社

李純根 一九九二「新羅末地方勢力の構成に関する研究」ソウル大学校博士学位論文

李陽浩 二〇一四「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態―前期難波宮東・西八角殿研究への予察」『難波宮と都城制』吉川弘文館

梁鍾国 二〇〇九「百濟復興運動と熊津都督府」『百濟文化』三五

盧重国 二〇〇三「唐の旧百濟地域支配」『百濟復興運動史』一潮閣